狂言

昭和34年1月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電@1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電@1196

年頭の辞

狂言共同社

さゝやかな本紙も、いよ〳〵三年をむかえました、そしてなお続いて発刊されようとしております。

名古屋の能楽がこれほど盛んになりましたのに、一つの機関紙も出ておりません、その中にあつて我が共同社が本紙を出しているのは、聊かながら此の道のために気を吐いているものと自負しております。

扨て例によつて昨年中の演能の統計をとつて見ますと、能は一昨年の百一一番に対し百一〇番とほゞ同数でありますが、狂言は一昨年の五五番が昨年は六四番とはね上り、狂言の発展振りを記録しております。いずれにしても「能」が盛んになることは誠によろこばしい次第であります。

そこで共同社は本年も別稿の通り朝日狂言会をはじめとし、なるべく古い珍らしいものを研究上演致し、狂言の普及に寄与したいと努力いたしております。

何卒相変らず御援助の程を希い上げます。

狂言人語

歌村彦四郎

○朝日の狂言会

朝日新聞社が、古典芸術のうちでも、近年とくに関心を持たれて見られるようになつた狂言を、ひろく鑑賞せられるようにと、名古屋にも朝日狂言会を企画されたことは、誠に時を得たものと思います。

そこで我が共同社も、これまで毎年催して来ました「狂言の夕」を解消して朝日狂言会に同調することにいたしました。ついては共同社を主体として東西の名手を交代に招請、その至芸を鑑賞することゝし、第一回を来る四月五日別稿の通り公開いたします。今回は狂言の最長老にして只一人の芸術院賞受賞者、無形文化財指定の茂山弥五郎師をお招きすることにいたしております、何卒御期待の程を御願いいたします。

○釣狐の大量競演

昨年十二月より本年一月にかけて、東京都民劇場公演として水道橋能楽堂に於て、能、狂言一番宛二十四日間催されるうちに、東西の狂言の若手八名が（和泉、大蔵より）八回の「釣狐」を演ずることは、実に空前の壮観であります。狂言の前途先ず洋々たる思いであります、諸子の御奮闘を期待いたします。

○三宅藤九郎舞台五十年

和泉流三宅藤九郎氏は舞台生活五十年と、重要無形文化財の指定を受けられたのを記念して、二月十五日水道橋能楽堂で祝賀狂言会を開催、秘曲「狸腹鼓」を上演されます。その意気壮にして頼母しい限りであります。御盛会をお祈りいたします。

○春の鑑賞能に唐相模

三月十五日田鍋氏主催の鑑賞能に、茂山千五郎氏の唐相模が演ぜられることになりました。当地としては徳川邸にて徳川家の唐装束を用い演じまして以来五十年振りのものであります。今回は共同社も応援出場して多人数で登場いたします、けだし春の見ものでしよう。

○朝日と中日の五流能

朝日新聞社は昨年第一回の五流能を県文化講堂に開催いたしまして、本年七月五日に第二回を計画決定されました。然るに中日に於ても昨年は休催したが本年は開催されることゝなり、三月二十八日同じく文化講堂で開かれる筈であります。期せずして豪華な五流能が二ツ盛りで見られる事は、狭い名古屋としては有難いような、一寸食傷気味ではないでしようか。

○名古屋能楽クラブの五流能

地元の能楽アマチュアの集り、名古屋能楽クラブでは、幹部の水藤氏が商売ソッチのけの大はりきり、三月二十九日の日曜日に文化講堂で堂々と五番立ての五流能を催されることは、誠にほゝえましい次第であります。番組も大ものを揃えての力演、今からたのしみにしております。

○乱能と風流座

師走のあわたゞしいひととき、中部能楽師会が世阿弥祭乱能を十四日能楽殿にて興行、鶴亀、安宅、葵上、、狂言文荷、三人片輪外に囃子、一調などお互に持場違いの役々に大汗をかき、猿公の太閤秀吉が演じたらかくあらんと思われる。西尾氏の鶴亀の帝王、藤田、惣一郎両氏の安宅には同山に囃子方若手総出の超力演で、ワキを舞台外まで押まくつて凱歌をあげるなど、当日一ばんの大人気。模擬店も賑わつて盛会であつた。

一方名古屋演劇ペンクラブは、十七日第四回風流座を御園座の檜舞台に公演、日頃演劇を批判する恐いおぢさん達に、画家、作家、病院長、社長、教授、デザイナーと他方面の名士が出演、芸題も菊畑、源治店、鏡山、十六夜清心と大ものを並べての大熱演、中には山下清画伯を出したら斯くあらんと思われる「虎蔵」、鏡山の大姫の所作に困つたあたり愛嬌もあり、御大の殿島、寺田、清水氏等はさすがと思われる老功さを見せられた。西川右近氏、長寿氏の参加は格外だが、長寿氏の軽妙さには敬服、最後の十六夜の清元の地は稽古充分か当日随一の好演と拝聴しました、今後の御奮闘を祈ります。

一月の予定

一月十一日　学生能　自演之部
狂言　雁礫　柳河達男　横井哲郎　勝彦

賀正

昭和三十四年元旦

狂言共同社

三人片輪　阿部武弘　板倉保臣　松尾知明　近藤雅弘
能小督　シテ中村閑也　ワキ立石澄雄　間　金田正孝
同　鑑賞之部
能葵上　シテ河村鉦二　ワキ高安滋郎　間　井上礼之助
狂言　佐渡狐　河村丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎
能蝉丸　シテ内藤泰二　ワキ西村弘敬　間　佐藤秀雄
一月十五日　清韻会　半前九時半初
能花月　シテ赤間鎮雄　ワキ西村弘敬　間　市橋良治
能遊行柳　シテ中島観月　ワキ高安滋郎　間　井上松次郎
狂言　鬼瓦　河村丘造　佐藤秀雄
半能高砂　シテ殿島修二　ワキ西村欽也
一月十八日　宝生定式能
能咸湯宮　シテ畑富次　ワキ西村欽也　間　佐藤秀雄
能熊野　シテ宝生九郎　ワキ西村弘敬
狂言　昆布売　井上礼之助　井上松次郎
一月二十四日　朝日土曜クラブ能
能巴　シテ内藤泰二　ワキ高安滋郎　間　井上礼之助
狂言　石神　河村丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎

狂言解説

雁礫＝野原に降り立つて居る雁を射た大名とそれを礫で射とめた通行人が互いに自分のものと云張る。通行人は大名の無躰の云いがゝりに腹を立てるが仲裁人の云分を立て、射とめた雁をも一度射させてみることにする。口程にもない下手な大名の放つ矢は雁に当るだろうか。

三人片輪＝有徳な人、片輪者を抱えんと高札を打つ、さて召抱えた三人が揃つて偽者であつて、盲が目を開き、唖が物を云い、いざりが舞うとは、主人でなくとも、これは如何な事である。三人三様の性格と小謡、小舞と仲々見所のある狂言です。

佐渡狐＝「佐渡に狐はないと云う」。御年貢を納めに上る越後と佐渡の百姓が此れで争つて掛録とする。狐を知らぬ佐渡の百姓はお案者に袖の下を贈つて狐のなりかつこうを秘かに教えてもらう。お案者の機転で勝つた佐渡の百姓は、怪しんだ越後の百姓に鳴声を尋ねられさあ大変。

鬼瓦＝訴訟悉く相叶つた大名帰国のお礼参りにお堂へ参詣する。国へ帰つて持仏堂を立てんと御堂の造りをみている内、破風の鬼瓦に目をとめて誰やらが顔によう似たがと案じ、おゝそれぞれ「国許の女共にそのまゝぢや」と落涙するが、思い直して笑い止めとなる。

皮肉な喜劇と云うか誠に人生の片鱗にふれた味いのある優雅な心情をほのぼのと感じさせる寸劇であります。

昆布売＝若狭の小浜の昆布売を道連れとした大名、太刀を持たせようと種々となぶる内に遂に腹を立てた昆布売に反対に散々なぶられて太刀刀をとり上げられる。

石神＝酒飲みの亭主、余り再々の事で女房にあいそを尽かされ、暇をくれい責められるので、女に家を出られては困ると、仲人のところへ意見をして貰うように頼みに参ります。女房も仲人のところへ家を出ることを相談に参りますが、仲人の計いで石神をひいて見て、みくじ次第にしたらよかろうと教えられ、思い直して石神へ参り「今迄の男に添へと思召さば上らせられい、添ふなと思召さば上らせられな」と願い神楽を舞います。ところが何と石神は本物ではなく、亭主が先き廻りして石神に化けていたのですが、神楽の面白さに惹いうかれ出て、とう〳〵見やぶられます。

古書検

歌村彦四郎

（古書検として本紙に掲載いたしますものは、家元「秘伝聞書」よりの抜粋で、今日まですべて未公開のものであります）

○殿中御婚礼に際し、古しへは狂言師の受持で「三国一」と云ふ御祝儀が有つたらしい、それについて六代目の元貞の物語りの一節。

一、享保初ノ比御婚礼ノ事ニ付、御祝儀御囃子等ノ節、終リニ狂言師ノ役ニテ「三国一」ヲ同音ニテ謡ヒタル也、其ノ後ハ絶エテ無之故、今ニテハ文句等モ知レズ、是ハ狂言ノ役ラシキコト、御慶事ノ相済ミタル上ノ祝言ニテ、其ノ御席ドツト御一笑ノ事ニテ有ルベシト也、尤モ其ノ後御婚礼事御催ノ節「三国一」相勤ムベキカト窺ヒ候処、其ノ時節ニ似合シカラヌ事カ、先ヅ此ノ度ハ夫ニ及ブマジトノ事ニテ、其ノ後引続キ絶エテ無之由也、是ハ古風第一ノ祝言ニテ、目出度上ノ目出度キ事ニテ有ルベシ、世俗ニ婚礼ノ祝儀スミタル跡ニテ「三国一の嫁入すまいた」ト云ヒハヤス事有ルト也。

○文化七年野村又三郎信興よりの問ひ合せに対し、元貞家元より返書のうち拍子についての所見。

一、拍子をふむに「習」あるとのよし、手前共少しも左様の事うけたまわらず、拍子と申は舞に「はえ」をあらする事にて、おもしろくふみなせば一ときわはえ有る也、右よりふみ出すこと、何も子細らしき事はなし、只ふみよきが故なり、すべて手も足も右よりすべき事もとよりなり、又流儀によつて左よりふむ事は其の家の何ぞわけ有るべし、おのれ思ふには俗に言ふ、まけおしみにて人が右よりふめば、こちらの流儀は左よりふなどゝ、すじなきことわりをいひ、〻く物々しうしたるものと思ふ也、右にてとまることもしかる也、但し拍子による也、「三番叟」、「田植」などかならず右にてとまる也、常の拍子とはやうかはりて、いきほひある事なれば、きゝ足にてとまるがふみよき也、こゝろみに左にてとまるようにふみ見るべし、心地悪き也、外の事の拍子は、とまりの事あながち右にかぎるべからず、さるは三番叟、田植などの様にふむ拍子も先づ無きかと覚ゆ、是はただ行次第に右よりふみ出し、文句、仕舞の程よろしく勝手よき所にてとむべし、是則ち拍子といふ物也、それを必ず右にてとめむなどゝする事、いとわずらはしき事也、ふみ出す事はきゝたる足なれば、右よりふむがふみよき也、夫も舞の行きがゝりによつては、左よりもふむ事あり、是も一つの心得也、当流拍子右よりふみ出し、右にてをさまるは訳のある事の様に古書に見え候、いかゞの事哉とのお尋ねにしても、如何なる古書かは不存候へ共、手前には無之候、拍子ふみ様に「習」の有る事は、その物々によりかわる事は勿論にて候、右に申事も則ち右よりふむならひ、とまるならひ、心得の極意と存候。

一、葵上の「ワキ」の出の「さしこ

窓

西村弘敬

新しき年を迎えお互にお芽出とう存じます。我が能楽界も年と共に益々盛んになり、是れ又誠に芽出度い限りに存じます。扨て毎年の嘉例としての宮中の御歌会の御題には、「窓」とお定めありし由に承つて居ります。我々が謡つて居る謡の中にも、此の窓という文字は各所に出て参ります。其の中から二、三拾い出して、其の出所などを詮索して見ましょう。

え」に「九識の窓の前」というのがあります、此の九識とは何の事かと調べて見ましたらば、

一、眼　識（げんしき）
二、耳　識（じしき）
三、鼻　識（びしき）
四、舌　識（ぜつしき）
五、身　識（しんしき）
六、意　識（いしき）
七、末那識（まなしき）
八、阿頼耶識（あらやしき）
九、庵摩羅識（あんもらしき）

右の様に仏教では識を九つに分けて考えて居る由で、即ち禅定の境地は、之れ等の九識を超脱した絶体境に住する事であるらしく、所謂心意を澄ました境地を、九識の窓の前と言い表わしたものと思われる。

二、鉢木の「クセ」の中に、「窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも」という一節がある、之れは和漢朗詠集にある藤原篤茂の詩

池凍東頭風度解　窓梅北面雪封寒

から取り入れたもののようである。

三、雷電の「クセ」の中に、「風月の窓に月を招き、螢を集め夏虫の」という句がある。之れは古え支那の貧生が、窓の雪明りや螢の光にて苦労勉学せし如くに、管公が幼時研学に志を傾けたらんを頌えたものであらふ。

四、芭蕉「シテ」の「さしこゑ」に「風破窓を射て燈消易く、月疎屋を穿て夢なり難し」とある、之れは百転抄にある。

月射破窓灯易滅　月茅疎屋夢難成

の句を其のまゝ引用したるものである。まだ此の外に窓という字はいくらでも出て来るが、余り永くなるので先ずこの辺で。

「語り」を勉強しよう

演能の中途、前シテが中入りして後ジテの出までの間、狂言方が所の者としてワキの求めに応じて、能の演じている事件や人物について説明をする、「居語り」は、上古の語部（かたりべ）以来の芸能の形をそのまゝ引ついでいると考えられている。それはあくまでも真の能の筋道を見物に解るように言い聞かせるのが役目で、演能において欠くことのできないものとなつている。

わらんべ草に「あいは能の誤義なれば、文字のこえにていふは、たけくらべとてきらう、皆人の聞きやすきように、やはらげて云べし」とあり、語りの内容は結局能の本文に敍述されてあることを平俗にくずして語るので、当事者にとつては、曲柄についての位、即ち、幽玄の情趣を主要素とする憂物、雄荘なる修羅物、儀礼的な脇能物鬼畜亡霊の現われる切　等等、それぞれの曲に応じての心持ちの変化等の苦心は並大低ではないのだが、見物の人々はすでに知悉していることの繰り返しであるので、たとえいか程巧みに語つたとしても、あくまでも、場つなぎでしかない、まして未熟な語りを聞かされては大変な忍耐を要するは当然である。しかし、「能一番のことよく知らざればさわやかに云にくし、智者の造りたるものなれば、なみ〳〵の学者にとふては、らちあかず、ことに難義の物なり」と童子草にある通り、間の内容の原拠は深いものであり、能の表に出ていない伝承形態を考えさせられることさえあるのである。しかし、あくまでも間語りは能の中間、場ふさぎでしかないのだが、しかし、こゝに間狂言の存在理由がある。之を省略したら前ジテ後ジテを各別の役者ですることになる。そうなると同一の役者が二つの主役を演じるということについての能の本来の一番大切な興味がなくなるのだ、矢張り語りの重復の退屈さを我慢して、間狂言を使わねばならないことになる。せいぜい勉強して間語りのもつと重大さを研究しようと思う。

なごやの朝日狂言会

ときと　昭和三十四年四月五日午後一時
ところ　熱田神宮能楽殿
主催　狂言共同社　朝日新聞社

狂言組

福の神　茂山弥五郎
墨塗　佐藤卯三郎　河村丘造
連歌盗人　茂山喜三　茂山幸四郎
盤山伏　井上松次郎

花折

石田歌　村上彦　喜四郎　横田

茂山幸四郎　中津信夫
佐藤秀雄
茂山弥五郎
井上礼之助　市橋良治
佐藤秀雄　山本次郎
伊藤宏文　井上義祐
佐藤友一　大野亞之次

視　言

「狂言の面白さ」

狂言の面白さ、優れた点、特質といつたものについては古今の学者が種々と解説され、説明つけられているので今更事がましく並べたてるのもどうかと思われるが、滑稽諧謔を目的とする舞台芸術としての狂言の他の喜劇に優れた特質はその表現しようとする、おかしみが、作為のない、あくどさのない朗かさや楽しさを感じさせる笑であることだと思う。自然に誰でも共感の出来るもり上つてくる笑いであり、しかも上品なものでなければならない。

明るい暮しの設計に……
工業技術院長賞受賞
JIS 合格品
HA2—B144型
世界の有名品
ブラザーミシン
BROTHER

世阿弥は「笑みの中に楽しみを含むことこそ面白く嬉しく感ずるものであるから、この心に見所の人々が和合して興を催すように演ずるのが幽玄の上階のおかしであるべきである」と云う意味のことを云つている。即ち世阿弥は狂言にも能と共通の幽玄味を求めているわけである。もつとも世阿弥の頃はすでに狂言は能に従属すべく余儀なくされていたから、そう考えるのも当然であつたが、此の為めにこそ狂言が卑俗、露骨、悪趣味を捨て、上品に、格調の高い、くすぐりのない滑稽を現在まで芸格を崩さず残して来たと云えるのではないだろうか。

一面広い大衆に愛され親しまれると共に他面能芸の愛好者達やその時代々々の教養人に理解され支持されて今までつゞいて来たのもそれあるが為であると思われる。

流儀々々によつて演出に対する主張も異なり、概して関東は芸格を高く持つているというか、能まがいの重い演出、関西の芸は派手すぎるとか、芝居じみた演出が多いと云う人があるが、果してどちらに軍配が上るか、当地の狂言は問題にならぬと云われる向もあるかもしれませぬが、軽妙、しやびつの境に入るまで、余りに能まがいにならず、又軽きにも失しない風格のある、とぼけた芸風を作り上げるべく努力しておりますが、さて〳〵むづかしや〳〵。

二月の予告

二月八日　能玄象　壺泉会　シテ　井上松次郎　ワキ　西村弘敬
能紅葉狩　シテ　井上礼之助　ワキ　高安滋郎
狂言　真奪　佐藤秀雄　佐藤卯三郎　河村丘造　市橋良治

二月十五日　能高砂　観世会初会　シテ　観世喜之　ワキ　西村欽也
狂言　隠狸　シテ　観世元正　ワキ　高安滋郎　河村丘造　井上松次郎
能鉢ノ木　シテ　大槻十三　ワキ　西村弘敬　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

二月二十二日　たなびき会
能杜若　シテ　水藤又吉　ワキ　西村欽也
狂言　舟ふな　井上義次　佐藤卯三郎
能紅葉狩　シテ　殿島修二　ワキ　高安滋郎　井上祐一　山本光次郎

楽師協議会よりおしらせ

十一月九日青山記子さん（山田仁三郎社中）は囃子でシテを披く。

十一月二十三日武田笑子さん（石谷初蔵社中）は囃子でシテを披く。

十二月七日鈴木慈郎氏・石島京子さん（杉村竹翠社中）は囃子でシテを披く。

十二月十五日日比野貞子さん（野崎太郎社中）は囃子でシテを、牧かつこさん林鉈子さん・種村としゑさん・杉田佳代子さん（大塚一二社中）は囃子でシテを披く。

新刊書の紹介

此の度初心者の為の簡易な囃子物六十一番を収めた「幸清流小鼓手附本」がわんや書店より刊行された。定価は八五〇円、送料六〇円、申込は東京都品川区大井豊町二の一一三幸円次郎氏又は名古屋市千種区大久手町四の一〇田鍋惣太郎氏へ。

幸清流小鼓方の長老であり名古屋能楽会の元老である田鍋惣太郎氏が、はじめて公にする芸談集「小鼓芸話」がわんや書店より刊行されている。定価は三〇〇円、送料三五円、申込は田鍋惣太郎氏へ。

新年謹賀

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
博勝会　
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
竹謡会　竹市秀雄
竹韻会　杉村竹翠
龍吟会　藤田六郎兵衛
謳調会
霞会　田鍋惣太郎
潤水会　林愚蔵
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎

名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎
名古屋能楽倶楽部　植村真太郎
風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金龍会　金森準三
共同社
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤錠太郎
松謡会　佐藤太後
祥雲会　永田虎之助
清風社　大塚一二
掬水青陽会　敬略（イロハ順）

狂言

昭和34年2月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上瓜兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1196

狂言人語　歌村彦四郎

新年会

一月三日午後三時恒例により、熱田神宮能楽殿に、能楽協会名古屋支部、中部能楽師会の面々相集り、舞台にて神酒をいたゞき、四海波を斉唱、終て謡初をなし、新年宴会に移り和気あいあいのうちに目出度御開きとなつた。

打ちとけて、春のこゝろや、窓の梅　（宗和）

学生能

一月十一日名古屋学生能楽連盟の学生能は、金城大、愛大、市短大、椙山大、南山大、県女大、名市大、名大、名工大の各大学の男女学生諸君が、能一番、狂言二番、舞囃子十二番、素謡、連吟、仕舞等四十番余を競演、中でも連調（太鼓三調）の羽衣等学生らしい雰囲気を発散して何れも熱心さを買うべきでしよう。但し第二部の鑑賞の部は時間的にも無くもがなと思われました。

たなびき会

田鍋惣一郎氏主宰のたなびき会は、本年が十年になるそうで、二月二十一、二日の両日に渉り熱田神宮能楽殿にて、囃子会を開き二日目には能二番と狂言一番を入れて各流の出演にて盛大に挙行されるよし、お目出度いことゝお喜び申し上げます。

朝日狂言会の彌五郎翁禮賛

予告の通四月五日朝日新聞社、共同社共催の狂言会には、茂山弥五郎氏を招聘して「福の神」を上演されます。丁度能楽思潮誌上に丸岡大二氏の「茂山弥五郎翁を観る」の結論を拝借して左に御紹介いたします。

弥五郎翁の狂言は常に非常な熱意で演ぜられ、少しも気をゆるめるところがない。そして何者かになり切つた心算のシテからは反対に多く個性がにじみ出て来る。勤厳実直、おそらくは日常生活にも非常にやかましいであろう翁が、一曲一曲に全精神を傾けて没頭する時、それは先代や先輩の写し絵でなどではなく、良くも悪しくも確実に彼自身の舞台を創造しているのだ。あの人の「福の神」は素晴しかつた、とある人が私に告げた。そう云われゝば、私は偏した物ばかりをみて来たようだ。成程今度見せてもらうとすれば「福の神」などはたしかに選ばれていい曲である。

と以上のように語つておられます、何卒この名人芸に接していただきたい。

二月の動き

二月八日　霊泉会　午前九時始
能　玄象　前シテ　伊藤正敏　後シテ　高槻健吉　ワキ　西村弘敬
能　紅葉狩　間　鈴木慈郎　井上松次郎　ワキ　高安滋郎
狂言　真奪　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　河村丘造　市橋良治

二月十五日　観世会　午前十一時始
能　高砂　間　観世寿夫　井上礼之助　ワキ　西村欽也
能　花筐　狂言　隠狙　間　観世元正　河村丘造　高安滋郎　井上松次郎
能　鉢木　間　大槻十三　二階堂佐藤卯三郎　西村弘敬　早打佐藤秀雄

二月二十二日　たなびき会　午前九時半
能　杜若　水藤又吉　西村欽也
狂言　船ふな　癋之舞　井上義次　佐藤卯三郎
能　紅葉狩　間　女シテ　殿島修二　ワキ　高安滋郎　末社　山本光次郎　井上祐一

なごやの
朝日狂言会
とき　昭昭三十四年四月五日午後一時
ところ　熱田神宮能楽殿
主催　朝日新聞社　狂言共同社

講演　徳川義親

福の神　茂山弥五郎
墨塗　佐藤卯三郎　河村丘造　佐藤秀雄
連歌盗人　茂山喜三　茂山幸四郎　茂山弥五郎
蟹山伏　井上松次郎　井上礼之助　市橋良治
花折　石田喜樹　歌村彦四郎
祝言　茂山幸四郎　中津信夫　佐藤秀雄　山本光次郎　伊藤宏一　井上文祐　佐藤友彦　井上義之　大野弘次

狂言解説

真奪＝まつすぐ　リツカ　シン

真直な立花の真を奪はんとかたなとられて帰る曲もの

見事な真を持つて通る通行人の真をねらつた太郎冠者。見事とり損なつて刃までとられ、今度は主と二人で取り返さんとして散々に失敗の連続。どこかピントの外れた太郎冠者の頓馬さを笑つて下さい。

隠狙＝近頃主に隠れて狙を捕えている太郎冠者。それを聞知つた主が突然狙の捕り方を聞いて白状させんとする。うつかりのりかけてあわてた太郎冠者。捕つた狙を主に隠して売りに出たが抜け目の無い主と市でバッタリ。こゝに主と太郎冠者が隠した狙で虚々実々の掛引となる。

船ふな＝遊山に出た主と太郎冠者。神崎の渡しで舟を呼ぶとて、舟とふなで歌争いとなるが、博学な太郎冠者に対して主は人麿の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」の一首しか出ず四苦八苦、あげくの果は謡にあるとて「山田矢走の渡し舟」とやつたまではよかつたが、ふな人もこがれ出らんと続く謡で遂に馬脚を表わす。

玄象の師長郷　西村弘敬

今月の霊泉会の能に玄象が上演されます。此の曲は古今に有名な琵琶の名手師長郷に関したもので、師長郷が琵琶で以て、支那大陸方面で名を為さんとの野心を持ち出掛けようとして、途中須磨の浦で仮泊した時に、之れも琵琶の御上手であつた。村上天皇の御神霊が、漁翁夫婦と現じ来り、名曲の調べを聞かせ、師長は之れに感動して、遂に入唐渡天の志を断念せしめられたるを作つたものであります。

此の藤原師長とは、源平時代の人で、藤原頼長の子息で琵琶管絃の技に長じ、一名妙音院とも言はれ、保元の乱に座して土佐の国に九年もの間流謫せられ、長寛二年に召し還されて本位

に復し、その後累進して遂に太政大臣まで極められたが、平の清盛の為に、関白基房郷以下四十三人等と共に再び流謫の憂に逢はされた。此の度は尾張の国井戸田へ流されたとある。そこで其の井戸田とは如何なる処かといふに、今は名古屋市瑞穂区師長町のあたりで、区画整理で土地が様相を変へたけれども、師長郷が謫居せられて居た場所は、今も其儘になつて居る。その場所とは、国体運動競技で有名な瑞穂「グラウンド」の前の道を東方へ坂を登ると田辺通りへ出る、其行当りを南へ約一丁程の処で東側に昔ながらの山林の形態で、その広さも凡そ二百坪位あるかと思はれる森がそれである。その東南隅の入口に碑があつて、師長の事蹟が詳しく刻されて居る。その大略は、横江某氏が相模の国から茲へ移住して住んで居た処へ、師長郷が流謫されて来て、茲で横江氏の娘の槐（えんじ）を召し使ひ寵愛して居た処、その後約一年程過ぎて、許されて、師長は都へ還つた。その時形見として、白菊の琵琶、法然上人書六字名号、阿弥陀仏々像と三種の品を残して行つた。娘槐は師長の別れを悲しみ、父に乞ひて髪をけづり、家を寺として茲に行ひ澄まして八十才迄永らへたとある。また白菊の琵琶は名器なれば、熱田神宮の宝庫へ献納した由に記されてある。今月玄象の曲が上演されるにつき、当名古屋にある師長郷の旧跡の事を思ひ出て少々ばかり御披露に及びました。

因に此井戸田（旧地名）附近一帯は何か由緒ある土地らしく、此の附近に万葉集にある阿由知水の歌碑と共に阿由知水なる古井も現存する。

三月の予告

三月八日　淡水会

能鶴亀　シテ橋岡久太郎　ワキ西村弘敬　間井上礼之助　石田喜樹　井上松次郎

狂言　あかぐり

三月十四日

能養老　間佐藤太俊　井上礼之助　掬水青陽会

能東北　間大槻秀夫　河村丘造

能舎利　間河村鉦二　井上松次郎

狂言　膏薬煉　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

三月十五日　名匠鑑賞能

能巴　間シテ辰巳孝　ワキ山崎俊助　佐藤卯三郎　茂山千之亟　茂山七五三　他二十二名

狂言　唐相撲

能千手　シテ野口宝生　緑久英雄　ワキ高安滋郎　九郎　西村弘敬　木村正雄

能綾鼓　間シテ宝生

三月二十一日　喜多会

能竹生嶋　喜多実　後藤得三

能湯谷　後藤得三

能石橋　和島富太郎

三月二十八日　中日五流能　於文化講堂　一部P・M〇、三〇

能清経　恋ノ音取　シテ観世元正　ワキ宝生弥一

狂言　貰聟　茂山千五郎　茂山七五三　茂山千之亟

能鵜飼　シテ喜多実　ワキ高安滋郎　九郎

能鵜飼　白頭　間シテ宝生　井上松次郎　河村丘造

同　能景清　シテ金春八条　ワキ高安滋郎　同　二部P・M三、三〇

能松風　見留　間シテ梅若猶義　ワキ宝生弥一　佐藤卯三郎

狂言　佐渡狐　野村万蔵　野村万之亟　野村万作

半能石橋　さんけい之式　シテ金剛巌　ワキ西村弘敬

三月二十九日　名古屋能楽クラブ　於文化講堂　午前九時

能鶴亀　間シテ岡田頼允　ワキ西村欽也　井上義次

狂言　亀喜　石田喜樹　河村丘造

能八島　シテ水藤又吉　ワキ西村弘敬

能胡蝶　間井上礼之助

能摂待　間シテ芋川順子　ワキ和泉太郎　佐藤秀雄

狂言　梟山伏　シテ森川如春　ワキ高安滋郎　市橋良治　大野弘之　佐藤友彦

能船弁慶　間シテ八田常次郎　ワキ西村欽也　佐藤卯三郎

お知らせ

能楽協会名古屋支部、中部能楽師会は一月三日新年会の日に総会を開き、年間事業報告、会計報告を承認、案件は委員に附託を決議しました。

楽師協議会世話役は本年より鬼頭八郎氏と交代、藤田六郎兵衛、歌村彦四郎の両氏になりました。お披き等の事務御連絡は両氏のうちへ御願ひいたします。

唐相撲について

三月十五日名匠鑑賞能に唐相撲が出ます。名古屋では五十年振りとか言はれておりますが、昭和三年天皇陛下御成婚の節、秩父宮両殿下が現在の徳川園当時の徳川邸へ御宿泊の時、先代野村又三郎氏の帝王にて、故井上新三郎氏の日本人、故井上菊次郎氏の通辞、其他共同社全員出演にて御台覧に供した事があります。之は一般公開でなく御前演出でありましたから、全員徳川家所蔵の唐装束で出演しましたが、お座敷の事であり橋掛りもなく行列も余り長く出来ませんし、その上時間の制限もあつて十分な演出も出来なかつたように覚えております。それから考えると今度の唐相撲は総員二十五名、立派な舞台で演出されることは今から想像するだけでも見ものだと思います。茂山千五郎氏を始めとする大蔵流の御一統の清新なる演出に共同社社中の協同出演による素晴らしい唐相撲はぜひ御覧頂きたいと存じます。

営業種目
青写真焼付
陽画写真焼付
製図用紙各種
特殊印刷紙加工
紙製品、巻紙（カッター）
紙截、打抜
製本一般
ビニール加工

迅速・丁寧・必らず御満足頂ける店
御用命は
合資会社　八木紙工所
代表社員　八木直正
名古屋市中区和泉町二
電話本局㉓3616番

狂言

昭和34年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電②1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電②1196

狂言人語

歌村彦四郎

一、（大阪）**朝日狂言会**

二月十日大阪三越にて、朝日新聞主催の第十二回朝日狂言会が催された。茂山弥五郎翁補導の下に、「鍋八撥」「船渡聟」「祐善」「止動方角」が演ぜられました。

大阪府が府民文化の普及発展、道義高揚を目ざして、去る昭和廿五年から府民劇場として毎月大阪で上演される各種の演劇、音楽、舞踊などのうちから、検討吟味して、最適のものを指定し、府民の鑑賞の手引きとしているが、此の朝日狂言会は古典芸術のうちでも、日本演劇の根源としての伝統を持つものとして、毎回指定されているばかりでなく、去る卅一年度の府民劇場賞を贈られております。

愛知県や名古屋市にも古典芸術の醍醐味のわかるお役人の、一人やふたりはありたいものであります。

一、（名古屋）**朝日狂言会**

別稿の通り名古屋でも来る四月五日（第一日曜）に、朝日新聞社、狂言共同社主催にて、第一回朝日狂言会を催します。

今回は茂山弥五郎翁を招聘して、大蔵流狂言「福の神」と「連歌盗人」を所望いたしました。地元和泉流の共同社も今猛稽古をいたしております。何卒御誘いあわされて、御鑑賞の程をお願い致します。

一、**唐相撲**

三月十五日の名匠鑑賞能に於ける茂山千五郎氏の唐相撲は、当地にては五十年振りのもので、当和泉流では「唐人相撲」と云います。主催者田鍋氏の斡旋で実現した事は誠によろこばしい事であります。

などやの

朝日狂言会

とき　昭和三十四年四月五日午後一時
ところ　熱田神宮能楽殿
主催　朝日新聞社　狂言共同社

講演	川義親
福の神	茂山弥五郎
	茂山幸四郎
	中津信夫
墨塗	佐藤卯三郎
	河村丘造
連歌盗人	茂山喜三
	茂山幸四郎
蟹山伏	井上松次郎
	井上礼之助
	市橋良治
花折	石田喜樹
	歌村彦四郎
	佐藤秀雄
	山本光次郎
	佐藤友彦
	井上義次
	大野弘之
祝言	

三月の動き

三月八日　淡水会
能鶴亀　シテ橋岡久太郎　ワキ西村弘敬
狂言　あかゞり　石田喜樹　井上松次郎
P・M一、〇〇

三月十四日　掬水青陽
能養老　シテ佐藤太俊　ワキ西村欽也
狂言　巣山伏　市橋良治　大野弘之　佐藤友彦
能船弁慶　シテ八田常次郎　ワキ西村欽也
佐藤卯三郎
P・M四、〇〇

能東北　シテ大槻秀夫　ワキ飯富良人
狂言　膏薬煉　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
能舎利　シテ河村鉦二　ワキ高安滋郎

三月十五日　名匠鑑賞能
能巴　シテ辰巳孝　ワキ山崎俊助
狂言　唐相撲　茂山千五郎　佐藤卯三郎　茂山千之亟　茂山七五三　他二十二名
P・M三、〇〇

能千手　シテ野口宝生英雄　ワキ高安滋郎
能綾鼓　シテ宝生九郎　ワキ西村弘敬

三月二十一日　喜多会
能竹生嶋　シテ喜多実　ワキ後藤得三
能湯谷　シテ和島富太郎
能石橋　シテ木村正雄

三月二十八日　中日五流能　於文化講堂
一部P・M〇、三〇
能清経　シテ観世元正　ワキ宝生弥一　恋ノ管取
狂言　貰聟　茂山千五郎　茂山七五三　茂山千之亟
能鶴　シテ喜多実　ワキ高安滋郎
能鞍馬天狗　シテ宝生九郎　ワキ高安滋郎　白頭
同　井上松次郎　河村丘造
二部P・M五、三〇
同　能景清　シテ金春八郎　ワキ高安滋郎
能松風　シテ梅若猶義　ワキ宝生弥一　見留
狂言　佐渡狐　野村万蔵　野村万作　野村万之亟　佐藤卯三郎
半能石橋　シテ金剛巌　ワキ西村弘敬　さんけいの式

三月二十九日　名古屋能楽クラブ　於文化講堂
A・M九・〇〇
能鶴亀　シテ岡田頼允　ワキ西村欽也
狂言　重喜　石田喜樹　河村丘造　井上義次
能八島　シテ水藤又吉　ワキ西村弘敬
能胡蝶　シテ芋川順子　ワキ和泉太郎　井上礼之助
能摂待　シテ森川如春　ワキ高安滋郎　佐藤秀雄

狂言解説

肼（あかゞり）＝主の伴をした太郎冠者、徒歩渡りの川へ来て、負へといわれ、腸に肼（スネ）が切れて負へぬと云ふ、肼という題で一首よめ、すれば負ひ越してやろうと云ふ主に、見事詠んだものの、昔から主が下人を負ふためしはないと川の中へ。

膏薬煉＝鎌倉と都の膏薬煉が互の名声を耳にし、膏薬をねりくらべんと思ひ立ち、互に膏薬の系図を語り家伝の薬種を誇り、膏薬の吸はせくらべとなる。鼻の先へ膏薬をつけた紙を貼りつけて、吸寄せ吸戻し、捩ぢ、しやくり秘術をつくすがさて勝負は？。

唐相撲＝唐の帝王に仕える日本の相撲取、帰国の望みを以て通辯をとして奏聞する。帝王さらば名残りに一手相撲がみたいとあり官人仕丁名指しを受けて相手になるが、日本人に勝てるものなし、帝王遂に自らとらんと、御自らをこもに包んで相撲をとるが見事に負け、日本人は群がる唐人を払いのけて退場、帝王は行列美々しく退場する。和泉流では唐の相撲名人赤頭の登場にて大相撲の一番が加えられるが、今回は大蔵流にて吹流し、百足、ひげとり等華々しい相撲の連続はさだめし皆様の御気に召す事と存じます。

貰聟＝夫の大酒にあいそをつかして舅の家へ逃げ帰つた嫁、どんなに言つて来ても絶対に帰らぬと云ふ娘の言葉に、本人を奥へかくして出るなととめて、扨て謝つて貰いに来た聟に逢つた舅、平身低頭する聟に知らぬと云ひ切つたが、子供の消息を聞かされて矢も

楯もたまらなくなつて思わずのり出す嫁、叱りつける舅、さてこのおさまりは。

佐渡狐＝昔から佐渡に狐はないと云ふが、御年貢を納めに上る越後と佐渡の百姓が、此の狐の事で掛録になり互の一腰をかける。狐を知らぬ佐渡の百姓はお奏者に袖の下を使つて狐のなりかつこうを教えてもらつて、お奏者の助けで賭にはかつたが不審を起した越後の百姓に鳴声で突込まれてハタとつまる。

重喜＝法事に出かけようとした住持。頭をそらせる門前のかい阿弥の居ぬのに弱つているのに、小坊主重喜が、私そりますと、かみそりを手合せしつゝ師匠につまずく、そゝつかしさに住持は、弟子七尺を去つて師の影をふまず、と云ふ事がある、以後たしなめと小言を云ふ。師匠の言葉にしたがつて、影をふまずに頭をそるには、重喜が発明した珍案とは？。

梟山伏＝横川の小聖気取りの物々しい先達、梟のついた病人を祈るが、法力より強い梟の熱心に、兄もろともにポーン、ポーンと梟につかれるみじめさ。

（能楽粋話）

俊成郷と定家郷

西村　弘敬

我が国中世の歌人にて千載集を撰ぜられたる藤原俊成の郷及び其の子息の定家郷の名は、しばしば我が謡曲の中に出て来る。その俊成の郷が子息定家郷の為に、歌道の上で如何に心を砕いて鍛練せられたかが、拙蔵の古文書の中に見当つたので茲に御披露する。

『俊成余りに定家郷を折檻して、いかなる秀逸の歌をも不叶とて押込め給ふ。或時、土御門帝の御はかりごとに、定家に百首を奉らしめ給へ然らば点歌に認め進上候へと仰出されける。程なく詠を進し申されければ、帝は俊成を召され、去る方より点申候へ共、此歌更に聞し召しわけられ難く候、奇特にて御批判に及ばず候、御へん点を加へ詳く批判をつけて進覧申べき由叡慮にて、彼巻物を被下候、俊成巻物を賜つて一覧に及び、此歌真実奇特なる歌共にて、更に天下に斯様に読むべき人覚へず候、帝御点可然由申上られ候へども、重ねての御諚にて、彼巻物を賜りて退出申し、暫く拝見申候て、一字一点難を書くべき詞なし、誠に作者の心中ありがたく、肝に銘じ句々文々に凡慮の及び難き由、点に記し、帝へ持参せられ、扨もかゝる歌人も天下にひゞける、末代の好生たるべき由、涙を流し申上られ候。帝は御へん余りに定家を折檻して歌をおされ候、いかに父子の間柄なり共、天下の上手をいかでおさるべきや、曲事にて此以後おし申さるべからず、是れこそ定家郷の歌にて候へと仰出されける、俊成郷誠に忝くて涙を流し、いかにも能くてもよく御座候へと存、折々は折檻を仕候事、若し油断にて欲もさがり申すべきと深く制し候、叡慮の旨返す返す有がたく候とて帰宅致され候、俊成も定家を悪ろく思ひて申されたるに非ず、是誠の深き義恩にて候、人の親の此事を見聞、子をば堅く制し申べき事にこそ。

右飛鳥井秘伝書に見ゆ』

四月の予告

四月五日　朝日狂言会

福之神　茂山弥五郎

墨一　佐藤卯三郎　河村丘造

P・M一、〇〇

茂山幸四郎　中津信夫

佐藤秀雄

連歌盗人　茂山喜三郎　茂山幸四郎

蟹山伏　井上松次郎　井上礼之助　市橋良治

花折　石田喜樹　歌村彦四郎　佐藤秀雄　山本光次郎　佐藤友彦　井上義次　大野弘之

四月十二日　観世会

能　邯鄲　手塚雅三　佐藤秀雄

能　班女　吉井司郎　河村丘造

能　安達原　柴田初太郎　和泉保之

狂言　川上　三宅藤九郎　和泉保之

四月十八日　梅猶会

能　仲光　梅若猶義　西村弘敬

能　舟弁慶　梅若盛義　高安滋郎

四月十九日　片岡松吟氏追善能

能　鳥頭　竹東秀雄　西村弘敬

狂言　武悪　井上松次郎　井上礼之助　市橋良治

能　杜若　金剛巌　高安滋郎

四月二十九日　観正会

能　巻絹　松井チエノ　西村弘敬

能　鶴亀　久田秀雄　西村欽也

狂言　竹ノ子　市橋良治　井上義次　大野弘之　山本光次郎

薬師協議会よりおしらせ

一月十五日、赤間鎮雄氏は能で花月を、杉浦重次氏は囃子でシテを披く（以上殿島修二社中）

一月廿五日、間下藤平氏、佐竹皓氏、伊藤実氏、山森幸雄氏は囃子でシテを披く（以上加藤丈太郎社中）

二月廿一日、村田京子さん、鈴木きくえさんは囃子で小鼓を披く、二月廿二日、白木豊氏は能、紅葉狩で小鼓を披く（以上田鍋惣一郎社中）

汎ゆる工場用品御用達
機械具工
水藤商店
名古屋市熱田区神戸町一五一番地
電話㊀一四一一、一四二一、一四二二
三二一六

プレス、鈑金、鎔接、製罐及び機械加工
資合社
スイトウ製作所
名古屋市瑞穂区熱田東町神明前六八
電話㊀八三一番

狂言

昭和34年4月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1196

謹告

四月十六日の「狂言鑑賞の会」には当地共同社は全然関係致しておりません。
皆様から御質問を受けますので念の為申し添えます。

共同社同人

狂言人語　歌村彦四郎

一、第一回朝日狂言会

四月五日の朝日狂言会には、旧藩主として当地和泉流狂言とつながりの深い、徳川義親氏がお話をして下さいますことは、誠に意義のあることと存じております。
又、狂言界の最長老として唯一人の芸術院賞受賞者、無形文化財、大蔵流の茂山弥五郎師が、御老体にかかわらず一家を引連れての御来演は、まことに弥五郎氏の狂言を見る会と言つても差つかえないと思います。地元の共同社中も一生懸命に努力いたしております、何卒御鑑賞の程をお願いいたします。

一、第二回観世会の「川上」

四月十二日の観世会には東京より和泉流の無形文化財三宅藤九郎師と宗家保之氏の父子が来演、診らしい「川上」という狂言をいたされます。同氏は去る二月舞台五十年祝賀狂言会に大曲「狸腹鼓」を演じ絶賛をうけられました、久し振りの来名であります。

一、金剛会の「武悪」

四月十九日金剛会には共同社の井上松次郎、井上礼之助、市橋良治の若手が、大もの「武悪」に取り組みます。如何に仕こなすか御期待が願いたい。

一、伝説釣狐について

去月茂山弥五郎先生よりの書信の一節に、釣狐の発祥地についておたよりがありましたので、そのままを転載させていただきます。
予て聞及ンで居りました伝説釣狐の発祥の地及び寺が、京都立命大学林屋教授に拠りて教えられ、一昨年松茸の頃、滋賀県犬山郡東甲良村慶雲山勝楽寺とあるを目的に探訪に出向きました。
（私の十七八才の時、堺少林寺の伝説は大蔵の九世頃の伝説であり、作者は玄恵法印であります故近江猿楽の発祥よりと俄に訪ひ度く行きました）東海道線彦根駅の西次の駅、川瀬駅で下車東方の山麓、兵火で記録何物もなしでした。建武年間近江の豪族佐々木殿、足利尊氏に討たれ、其旧跡佐々木殿の冥福を念じ寺とし（建仁寺派）その後何代目かの人（和尚の出来事）代々佐々木性、現在二十四世でしたか、書けば長くなりますので拝顔の折申上ます。

来る四月二日、此の御令息様が、お寺を継がれる慶讃会があり、大蔵へ（宗家弥太郎氏）狂言を奉納してまいらせることにいたしました。

四月二日　午後一時始、於　勝楽寺
小舞　海道下り　弥五郎
末広がり　シテ忠一良
釣狐　シテ圭五郎　アド大蔵
覆　猿　シテ幸四郎　狂言喜三　太郎孝夫　小猿都茂　傘張宮崎　太郎中津信夫

以上

私が探して居た勝楽寺が判明したよろこびで右御当日奉納仕り、伝説の御寺で釣狐を実演させます。
文献がない当流儀では何を語る資格もありませむ然し文献がなくば、伝説を尊重致さねばならむと私のみの信念で右奉納致させます。

＝四月の動き＝

四月五日　朝日狂言会　P・M一、00
福之神　茂山弥五郎
墨　塗　佐藤卯三郎　河村丘造　茂山幸四郎　中津信夫
連歌盗人　茂山喜三　茂山幸四郎
蟹山伏　井上松次郎　茂山弥五郎
花　折　石田喜樹　歌村彦四郎　井上礼之助　市橋良治　佐藤秀雄　山本光次郎　佐藤友彦　井上義次　大野弘之

四月十二日　観世会
能　邯鄲　シテ手塚雅三　ワキ田村欽也　問佐藤卯三郎
能　桜川　シテ吉井司郎　ワキ西村弘敬
能　安達原　シテ柴田初太郎　ワキ高安滋郎　問和泉保之
狂言　川上　三宅藤九郎　和泉保之

四月十八日　梅猶会
能　仲光　シテ梅若猶義　ワキ西村弘敬　問佐藤秀雄
能　舟弁慶　シテ梅若盛義　ワキ高安滋郎　問佐藤卯三郎
狂言　花争　河村丘造　井上松次郎

四月十九日　片岡松吟氏追善能
能　実盛　シテ大塚一二　ワキ西村弘敬　問佐藤秀雄
狂言　武悪　井上松次郎　井上礼之助　市橋良治
能　杜若　シテ金剛巌　ワキ高安滋郎

四月二十九日　観正会
能　巻絹　シテ松井チエノ　ワキ西村弘敬　問河村丘造
能　鶴亀　シテ久田秀雄　ワキ西村欽也　問井上義次
狂言　竹ノ子　市橋良治　大野弘之　山本光次郎

狂言解説

福ノ神＝　有徳人二人、年越参りに大社へ参詣する。豆蒔と共に福ノ神が出現されて福を授けると云う目出度い狂言であります。

墨塗＝　訴訟の為在京中馴染みとなつた女に帰国すると告げ、泣きつかれた大名は情にほだされて共に泣き出す。女の涙が鬢水入の水と知つた太郎冠者、水入を墨と取替える。……心持ちと動きのよく出た曲である。

連歌盗人＝　連歌好きの二人、当に当つて其の準備に困つて俄泥棒、しかし矢張り連歌の為に失敗して主人に見付けられる、ところが此の主人が又連歌好きとあつて、連歌の為に救われて、強力をうけて、当も出来る事となるとは。

蟹山伏＝　行力の強い山伏、能力をつれて山道を通る内一天俄かにかきくもり、一大音響と共に出現した怪物「二

眼天にあり一甲地につかず大足二足、小足八足、右行左行して世を渡る者の精」とは……。

花折＝　花見禁制と言付けられた新発意、花見の衆を断つたものの之れ見よがしに門前で花見をされてはたまりません、一策を案じて花に御酒を上げさしめとは正に傑作で、一緒に酒盛りとなるおほらかなのび〳〵した花見抒情が舞台一杯に拡がつて、いかにも面白い狂言であります。

川上＝　川上の地蔵が霊験あると聞いた俄盲が参籠の一睡に夢の告があつて忽ち目が明く。持つた杖も捨てて喜び勇んで帰る途中で迎の妻に逢つたが……お告げに現在の縁は悪縁ぢや妻を離別せよとあつたと聞いては妻は怒らずには居られません……あの川上の焼地蔵の腐れ地蔵奴がぬかしおつた事わいやい、永い間妾に介抱させおつて今目が明いたればとて其様な片手落ちな事があるものか……とかきくどく妻の言分に、尤もと一緒に帰りかげる途中、お告げに背いた罰か次第に目が霞んで来る。

男「此様な事と知つたらば最前の杖は捨てまいものを男は悲しみ乍らも妻に手を引かれて家路につく。

東京の三宅藤九郎氏が、家元和泉保之氏と此のしつとりとした情抒ある狂言を如何に演出されるか、参籠中の情景。次第に視覚がはつきりしている件り。再び見えなくなつて来る悲しみの経過、最後のセリフを終つて悄然と手を引かれて去る迄、三宅氏の円熟した芸を御鑑賞願います。

武悪＝　生来不奉公の武悪、たび重なる不奉公に腹を立てた主は太郎冠者に討てと太刀を預ける。主命によつて討手に向つた太郎冠者、成敗せんと刀を振り上げたが……朋輩の歎きをみてどうして討てよう、秘かに命を助けて落してやる。扨て、見事討ち果したと主をだまして東山清水へ追善の為参詣に出た二人の目の前へ討たれた武悪が顔を出すとは。太郎冠者の機転で幽霊に化けた武悪は、憶病な主をさん〳〵おどす。人情味溢れる武悪の上意討の息づまるような呼吸、一転して笑を誘う武悪の主に対するいやがらせ、傑出した演出の妙は舞台にすぐれた気分をただよわす狂言の中でも代表的な名作です。

竹ノ子＝　隣の畑へ根をさした竹ノ子をその畑の者が掘つたのを盗んだと怒つた男、仲人がそれを止めて勝負にする。相撲になつたが、此の男足が悪くて棒で支えているその棒で打ちかかるので相撲にならず、一策を案じた仲介は相手に耳打ちして此の棒をとらせるので……。何時の時代にもある横暴なエゴイストの話で、そのへりくつと意故地な態度が笑を誘います。

花守＝　花見に出ようとした主、太郎冠者は屁理屈をこねて桜見とこそ云え、花見とは申しませぬと云い出すので桜と花の歌ぜんさくとなる。

「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」「行くれて木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし」「山桜霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」「花の色はうつりにけりな徒らにわがみよに経る眺めせしまに」とゞつまつた太郎冠者謡があると出した謡が桜かさしの袖ふれて……後が花見車　つて叱られる。

＝五月の予告＝

五月三日　松謡会

翁　佐藤太俊　千歳　三番叟　佐藤秀雄
半能　高砂　佐藤太俊　面箱　佐藤友彦
狂言　文山賊　市橋良治　大野弘之

五月二十四日　たなびき会　A.M　一〇、三〇

一部

翁　梅若万三郎　面箱　井上義次　三番叟　井上松次郎　千歳　山本勝一
狂言　末広　河村丘造　佐藤秀雄　市橋良治
二人静　観世武雄　観世喜之　西村弘敬
立出ノ一声
乱　橋岡久共　高橋静夫　高安滋郎
双ノ舞
二部　P.M　四、〇〇
能羽衣　大槻秀夫　西村弘敬
和合ノ舞
狂言　吃り　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村丘造
安宅　梅若六郎　高安滋郎　井上松次郎　井上礼之助
間　間
半能石橋　柴田収　柴田初太郎　西村欽也
大獅子

楽師協議会よりのおしらせ

一月十一日　中村閑也氏学生能に「能小督」を披らく（内藤泰二社中）

坪内節太郎劇画展

行動美術協会審査員の同氏は歌舞伎、能、文楽の心酔者である。その客席よりのスケッチ展御高覧が願いたい。

時　四月三日～八日まで
所　名鉄デパート六階画廊
主催　名古屋劇ペンクラブ

御観光に
御商用に

名古屋駅前トヨタビル南側

日本観光旅館連盟
日本交通公社
日本旅行会
近畿日本ツーリスト
協定

旅館　むさし家
電話㊹1396～8

狂言

昭和34年5月1日発行
発行所
名古屋市中区真門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1190

狂言人語

歌村彦四郎

一、第一回朝日狂言会の御礼

四月五日朝日新聞社、狂言共同社共催の第一回朝日狂言会を催しましたところ、徳川義親氏の狂言についての講演、芸術院賞受賞者で無形文化財保持者茂山弥五郎師の大蔵流「福の神」を皮切りに「墨塗」「連歌盗人」「蟹山伏」「花折」など、茂山一門に地元和泉流の共同社合同の熱演に、つめかけられた観衆にもお喜び願えたことゝ、自負致しております。

御同好の諸賢の絶大なる御賛助を得まして盛況のうちに幕をとじましたことを、社中に代つて厚く御礼申し上げます。

なほ続いて来春は第二回を開催致す予定であります、重ねて御期待の程を御願いいたします。

一、三宅藤九郎氏の狂言「川上」

四月十二日の観世会に久し振りに三宅父子の「川上」は見ものでありました。日ごろ発声のやかましい同氏が、ともすればいやみになる此狂言をたくみに腹におさえ、力のこもつたしぶい芸を拝見いたしました。

五月の動き

五月三日　松謡会　午前9:00
翁　佐藤太俊　面箱　佐藤友彦
三番叟　佐藤秀雄　千歳　柴田収

半能　高砂　佐藤太俊　高安滋郎
狂言　文山賊　井上松次郎　大野弘之

五月十六日　於NHKホール
昆布売　佐藤卯三郎　河村丘造

五月二十四日　一部　午前10:30　たなびき会
翁　梅若万三郎　面箱　井上義次　三番叟　井上松次郎　千歳　山本勝一
狂言　末広　河村丘造　佐藤秀雄　市橋良治
能　二人静　観世武雄　観世喜之　西村弘敬
能　乱　橋岡久共　高橋静夫　高安滋郎

二部　午后2:00
能　羽衣　大槻秀夫　西村弘敬
狂言　吃り　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村丘造
能　安宅　梅若六郎　高安滋郎
間　井上松次郎　井上礼之助
石橋　柴田初太郎　西村欽也　柴田収　梅猶会

五月三十日
仲光　梅若猶義　西村弘敬
間　佐藤秀雄
舟弁慶　梅若盛義　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
狂言　簸屑　河村丘造　井上松次郎　井上礼之助

―狂言解説―

（三番叟）の舞については、皆様既に御承知の事と存じますが、前半が揉の段、後半が鈴の段の二部に別れ、前半は軽快潑剌とした喜び飛躍、後半は面をつけて鈴を振つての荘重なる舞であります。

文山賊、弱い山賊二人、仕合せを仕損じ、お互に言ひつのつて組打ちとなるが人に知られず死ぬのは本意ないと書置きを残す事とし、

「扨も〳〵只假初めに家を出て山賊を仕損じ、人の物をもえとらずして結句どしどし口論し引くなよ我ものがさじと刀のつかに手をかくる」云々の名文句で引こまれて両人共に泣き出したが……さてこの治まりは、

末広、脇狂言の代表として余りにも有名なもの。末広がりを求めに都へ出た太郎冠者、扇であることを知らぬまゝまんまと都の者にだまされて傘を買はされて帰る。怒つた大名の機嫌を直すため、囃子物をする太郎冠者。知らず〳〵怒りを収めて浮きに移る大名ののどかさ、お目でたい狂言です。

吃り＝此狂言は所謂夫を凌駕する妻の可笑味で之に加えて其夫が吃りである事による弁明のもどかしさを謡によつて解決させると云ふ稀にみるすぐれた狂言です。

働らきが悪いと女房に追廻される男仲裁に入つた人に悪しざまにのゝしる女房に腹を立てるが吃りである悲しさ口がもとおらぬ。しかし謡でならばと、とうとうと女房の言葉を反撥するがさてその結果は、

簸屑＝簸屑をひけと云はれた太郎冠者居眠り斗りするので、用から帰つた次郎冠者が話をしたり、舞をみせたりするが、どうしても居眠りがとまらぬ、腹を立てた次郎冠者が武悪の面をきせる。知らずに其儘主の前へ出た太郎冠者鬼と云はれ鏡をみてビックリ、どうして鬼となつたものかと驚く。さてこの治まりはどうなるか。……

皇太子妃と濁音

三宅藤九郎

私は、もと目白に住んでいたので、今でも目白文化協会の一員になつている。この会は名前だけは鹿爪らしいが、目白に住む二十人ばかりの文化人？が暇な一、二時間を放談で時を過ごそうという所謂トオのたつた悪童どもの集りなのである。

正田美智子さんの最初の記者会見の直後にこの会合があり、会長の徳川義親氏は欠席されたが、美智子さんの大伯父さんに当られるオリエンタル酵母の会長の正田卓治氏が来られたので、話題は自然そこに集中された。

私は、美智子さんの悠揚せまらぬ御態度と気品を絶賛したが、ただ、自分が狂言、という、セリフをもとにした芸にたづさわつているところから、とかく発音を気にする癖があつて、美智子さんが、鼻濁音のガとゲを濁音でおつしやるのが惜しく思われたと述べると卓治氏は「両親の出生地の群馬なまりであろうから早速美智子に伝えておきましょう」と言われた。

同月の末頃の新聞に、言語学の研究家で大映の俳優のアクセントを直す仕事もやつていられる川上蓁氏や評論家の池田弥三郎氏もやはりこの美智子さんの濁音に触れて書いていられた。今年の正月のラジオ東京での渋沢秀雄さんとの新春対談の録音にも私はこの話をした。

ところが、其後美智子さんの言語をテレビで拝聴すると見事にこのナマリは直されていたので、御矯正の早さに驚歎した。

同じ事を新聞に書かれた川上氏も、実は、狂言の発声の研究に私の宅へ稽古に来ていられる人なので、数日後の稽古日に逢うと「自分がやかましく教えている映画俳優だつてこう早くは直りませんヨ」と言つていられた。

皇太子妃の御聰明さは、こうした些細な事からもうかがえて、今後の明るい皇室、明るい日本がいよいよ楽しく期待される。

（能楽粋話）

弱法師の一節

西村弘敬

弱法師の曲は諸氏の愛吟せられる謡でありますが、其のシテの出の上歌の謡の一節に、「伝へ聞く彼の一行の果羅の旅、暗穴道のちまたにも、九曜の曼陀羅の光明」云々とあります。之れはどうゆう事を謡つたものか、其の意味を御承知の方もある事とは思ひますが、或はまだ御存じなひ方もあるかも知れませんので、私の拙ひ研究の一部を茲に御参考迄に記して見ます。

平家物語の一節に一行阿闍梨の事といふのがありますが、それを取り入れたものかと思ひます。其の大略は「昔玄宗皇帝の護待僧に一行阿闍梨といふ人があつて、之れが玄宗皇帝の后で彼の有名な揚貴妃との間に、あらぬ風評が立ち、無論何の関係もなきに良く調べる事もなく、唯口さがなき人の噂だけで以て、遂に果羅の国へ流刑に処せられた、此の国へ行くのに、重科の罪人は暗穴道といふ道を通らねばならぬに、此の道は七日七夜の間は、月日の光も見へず、冥々として人もなく、森々として鳥の一声もせず、苔の露に衣の袂を濡らす、誠に惨澹たる処へ、斯様に無実の罪を蒙りたる者を送るのを、天道之れを憐み給ひ、九曜の象を現じて、一行阿闍梨を守り給ふ、此世に一行阿闍梨は感激して、右の指を喰ひ切り左の袂に九曜の象を写された、之れを九曜の曼陀羅と申す」とある。

弱法師は元来高安左ヱ門尉通俊の子なりしを、誰かの讒言の為に、家を追ひ出され、遂に乞食の身にまで落ちたけれども、もともと罪なくして斯かる憂き身となつた事故に、彼の一行阿闍梨の様に、九曜の曼陀羅の光明によつて守つて戴けるかも知れぬと、淡ひ希望を述べたものと思はれる。

六月の予告

六月五日　熱田神宮大祭奉納
不見不聞　河村　丘造
佐藤卯三郎　井上松次郎

六月七日　中部楽師会
西王母　加藤総兵衛　西村欽也
問　佐藤　秀雄
社　若　内藤　泰二　西村　弘敬
安達原　殿島　修二　高安　滋郎
問　井上礼之助

狂言　腰祈　佐藤卯三郎
井上　義次　井上松次郎

六月十四日　観世会
能　実盛　梅若　六郎
問　佐藤　秀雄
能　富士太鼓　山本　博之
問　歌村彦四郎
能　葵上　梅若　猶義
問　市橋　良治

狂言　鼻取相撲　井上松次郎　河村　丘造
井上礼之助

六月二十日　掬水青陽会
能　芦刈　久田　秀雄　西村　欽也
問　市橋　良治
千手　佐藤太俊　高安滋郎
柴田　収
態坂　観世元昭　西村弘敬
問　井上松次郎

狂言空腕　井上礼之助　佐藤秀雄

六月二十一日　宝生会
能　藤　内藤泰二
問　佐藤　秀雄
能　三井寺　宝生英雄
問　市橋良治
佐藤卯三郎

狂言　入間川　井上松次郎　大野弘之
河村丘造

朝日狂言会についてお願い

朝日狂言会の蟹山伏についてこんな質問をうけました。「六ケ敷い」の発音はムツカシイかムヅカシイかどちらが本当か。狂言の発生が関西であるならばムツカシイが本当だと思ふ。しかしシテの山伏が出羽の国羽黒山と名乗るから殊更にムヅカシイと東国なまりで云ふのかもしれぬがどう思ふかと某学校の先生から聞かれました。研究不足の我々御返事に困りました。同好の皆様方の御意見をおきかせ下さい。尚当日御撮影の写真ですてきなのがありましたら共同社へお分け下さい　おねがいします。

楽師協議会よりのお知らせ

おひらき御挨拶（敬称略）

2・21　筧鉱一（大鼓）囃子　永田社中
3・22　E・A・ラニヤ（シテ）〃　殿島社中
〃　土居巌亀（笛）〃　金森社中
3・29　芋川順子（能胡蝶）　辰己社中
〃　太田吉彦（能船弁慶）　河村社中
4・11　西川司津（能猩々）　二井社中
〃　岩佐うめ　〃　囃子　〃
〃　寺西美依子　〃　〃　〃
〃　加藤博丸　〃　〃　〃
〃　服部正一郎　〃　〃　〃
4・19　尾張隆（シテ）囃子　豊島社中
〃　井上富俱子　〃　〃　〃
4・11　佐々木道子（シテ）囃子　山田社中
〃　高井敏雄（大　〃　鬼頭社中

名古屋市中区南伊勢町二

洋額　画縁　合名会社　三角堂

駅前毎日ビル一階店

〃　画廊ホルベイン

狂言

昭和34年6月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

一、田鍋惣太郎氏、大阪能

さきに東京にて舞台六十年記念能を開き郷土人の気を吐き、去る五月十日には大阪に開き大槻秀夫氏の道城寺に小鼓を勤められた、秋には京都に記念能を開き道城寺を勤めらるゝ由、その意気たるや老いて益々壮、まことに羨しい次第であります。

能楽界の大御所としての存在は実に名古屋の誇りであります大いに御自重御健在をお祈りいたします。

一、第二回朝日五流能

昨年県文化講堂仮設能舞台の舞台披を兼ね、第一回朝日五流能を開催好評を得た朝日が引続き第二回を開催いたします。

企画には能楽協会名古屋支部も参画し、別稿のような豪華な番組が出来ました。

狂言「瓜盗人」は大蔵流の長老茂山弥五郎氏が特に老躯を押しての来演、茂山喜三氏の助演に瓜畑に瓜を採る仕科、カガシを相手に笛のアシライで「セメ」を舞はれます、先づ当代一の名演技が見られると期待しております。

「悪太郎」は地元和泉流宗家の伝統をつぐ三人が出演、卯三郎氏が大薙刀をふりまはしての悪太郎ぶり、酔夢の間に髪を剃られてからの後半、アド丘造氏、彦四郎の助演と共に名古屋の味を発散することでせう。

安宅の間の小書「貝付貝立」はシテの方で小書がつくと狂言から出すことがあります。関のようすを見てかへり、シテとの応答がすむと正面及ワキ正面に扇を半ビラキにして、ツーワイ〳〵と吹き、シテに「さあらば貝を参らせ候」と腰につくる体をする、当地ではしばらく出ない珍らしいものです。

道城寺の間は金春流のため楽屋より、エイト〳〵と釣つて出て舞台につります。釣るにも型のあるもので順序よく運ばねばなりません。

乱拍子がすんでシテの鐘入りで鐘が落ちると同時に驚いて能力二人がころげ出る、このことを住僧に報告するについて、お互にゆずり合ふおかしさ松次郎、礼之助両氏の出演定めし意気の合つたところを見せることでせう。

多くの方の御鑑賞をおすすめいたします。

一、大衆能の催し

昨夏中部能楽師会が文化講堂に、名城建設献金能を催し好成績を納め各方面から激励を受けました。

今後も毎年一回はこのような催しを致したいと協議のうへ本年も、来る八月十五日に文化講堂で開く予定で目下企画中であります、皆さまのお力添へをお願い致します。

一、劇「いづみの会」の上

いづみの会と云ふ劇団が、三島由紀夫作「葵の上」を寺田栄一氏の演出で発表された。病気……どうした病気なのかわからないが……葵は病院のベットに横たわつている。しらせで旅から光は戻つて来る。そしてどういう人だかわからないが、深夜見舞いにくる人があると、看護婦からきかされる……そこえ、六条の生霊が現われて……と解説にあるとうり古典を現代化した最新判、但し名前は能の通りで筋は面白くこなされている、舞台装置も能式にごく簡単、思い出の場など特にしやれている。たゞ出演者に今少し場馴れがほしいと思つた。

寺田栄一氏の努力を買う。

―六月の動き―

六月五日　熱田神宮大祭奉納

囃子数番

狂言　不見不聞　河村　丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎

六月七日　中部能楽師会能　十二時始

能西王母　シテ加藤総兵衛　ワキ西村　欽也　間　大野　弘之

能杜若　シテ内藤　泰二　ワキ西村　弘敬

能安達原　シテ殿島　修二　ワキ高安　滋郎　間　井上礼之助

狂言　腰祈　佐藤卯三郎　井上　義次　井上松次郎

六月十四日　観世会　正午始

能実盛　シテ梅若　六郎　ワキ西村　弘敬　間　佐藤　秀雄

能富士太鼓　シテ山本　博之　ワキ西村　欽也　間　歌村彦四郎

能葵上　シテ梅若　猶義　ワキ高安　滋郎　間　市橋　良治

狂言　鼻取相撲　河村　丘造　井上松次郎　井上礼之助

六月二十日　柳水青陽会　午后四時始

能声　刈　シテ久田　秀雄　ワキ西村　欽也　間　佐藤卯三郎

能千手　シテ佐藤　太俊　ワキ高安　滋郎

能熊坂　シテ観世　元昭　間　西村　弘敬　間　井上松次郎

狂言　空腕　井上礼之助　佐藤　秀雄

六月二十一日　宝生会　午后一時始

能藤　シテ内藤　泰二　ワキ西村　弘敬　間　佐藤　秀雄

能三井寺　シテ宝生　英雄　ワキ高安　滋郎　間　岁吉市橋　良治　能力佐藤卯三郎

狂言　入間川　井上松次郎　大野　弘之　河村　丘造

狂言の解説

不見不聞＝　一人召使ふ太郎冠者がツンボで留守を心配した主は出入の座頭菊市を頼んで出かける。所在なさにツンボをなぶる菊市に太郎冠者は小舞をきかせて終つた合図に顔を足でなでる。之と悟つた菊市。平家をかたるとて散々ツンボをこき下ろす。さて此おさまりは……盲は耳で相手の動きを洞察し、つんぼは目で相手の意図を探らんとする虚々実々の仕科の妙。この狂言のみどころです。

腰祈り＝　百歳に余る祖父。可愛い孫の京の殿が山伏修行より帰つたとの事に喜んで対面し腰が曲つて日の目が見えぬとのぐち。之を聞いた京の殿、日頃の修行の験をみせんとその腰伸して進ぜうと一祈り。効果あつて伸びた腰に一時喜んだ祖父も、之きり曲らぬと聞いては大弱り。元の通りにして返えせと叱られて、あわてた京の殿の法力は祈れば祈る程伸びすぎたりかゞみすぎたりの大失敗。

わずかの法力を誇示する新参修験者の失敗。祖父の身のこなしと言葉使いが一番六ケ敷いとされて余程の芸達者でないと困難視される狂言です

鼻取相撲＝

鼻取相撲とはどんな相撲と思召す。或大名新参の者を抱えて何ぞ芸はないかと聞く。太郎冠者から大名の相撲好きを聞いた新参の者は相撲を得てとると答える。さあ相撲がみたくなりとれと云ふのだが相手がない。ぜひなく大名は自分でとろうと云ふ事になるさて立上つてヤツと手合をすると鼻の先へ手をよこしたとみるまに目がクラ〳〵して負ける。ハテ面妖な何と云ふ手かと尋ねると阪東方にはやる鼻取と云ふ手と答える。きやつに負けては口惜しいが鼻を取られては悪い、何とせうと太郎冠者と相談の上鼻に要害を当てゝ今一番とろうとなる。ところが今度は又キリ〳〵と引廻されて、アツサリ負けとなる。鼻の要害何の役に立たぬと投げすてゝ立つたものゝ、イカニも腹にすえかねて幸いボンヤリしている太郎冠者へ、イヤー〳〵とかゝつて行く……のんびりした大名、見栄坊の大名の典型と云へるでせう。

空腕＝　日頃おく病のくせにそら腕立をする太郎冠者を試めさうと主は太刀をもたせて使に出す、後をつけられるとも知らぬ太郎冠者は途中で主の先廻りして立つたのを主とも知らずおそれおのゝいて、太刀を差出して平頭低身、呆きれた主はとつて返して帰つた太郎冠者にどうしたと聞く、長々と仕方話で、一騎当千振りを並べて盗賊に出合つて力の限り斬りまくつたの太刀の刃がこぼれたのと散々大法らを聞いた上で、主が近頃求めた太刀を見よと云ふ。拝見と手にとつて見れば、さあ大変、折れて敵へ投付けたはづの太刀とは……。

入間川＝　入間言葉を趣向に立てた狂言東国大名帰参の途中入間川で、入間ようを云ふ川向の何某にたぶらかされ小袖、上下、太刀、刀扇までも取られるが、入間ようをさらりと捨て、と云はれうつかり本気で「身に余つて忝い」と云つた言葉をとらへて「入間ようで忝うないと云ふであろうこちへおこさしめ」と取返す。相当複雑な曲柄であるが言葉のやりとりの面白さとノホントした大名のおほらかさで上品な笑をさそい出す優れた狂言です。

入間川について狂言不審紙より

此狂言の事わらべ草に云、昔東本願寺へ近衛王公青蓮院御門衆御入有し時入間川の狂言の事入間ようとて言葉をさかさまに云、命を助り又物を貰うて取返す事不審なりと、近衛王公御尋ねの時、弥右ェ門御受申上候様浅き事に深き事有、深き事に浅き事有、深く思召るゝ間返つて御不審に思召れ候。入間ようにて申ば、忝と言は忝無事也と申事に候と申上しとそ。

俳優考に云、詞をさかしまにして云事は其比の東国の俗にて有しを、そのならはしの都に移りてよき人ももて興じ給ひし也と、按に入間ようの事成べし。

富士山、四海無双の名山にして駿河甲斐相摸三国に蟠るといへ共駿河国、富士郡に有ば富士山と号、駿河のふじ共言、竹取物語登天段に云

するがの国にあなる山の頂に持つくべきよし仰給ふ。峯にてすへきやう教させ給う御文、不死のくすりの壺ならへて火をつけてもやすへきよし仰せ給う所のよし承りて兵者もあまたくして山へ登りけるよりなん。その山をふしの山とは名付ける。

入間川、武蔵国多摩郡に有る川を玉川と云六玉川の一つなり、入間里にては六郷川と云。

入間川と云六郷の里にては六郷川と云。

第二回　朝日五流能

とき　七月五日（日）

ところ　愛知文化講堂

第一部　能組（午前十時半始）

金剛　永謹
金剛　巌

邯鄲　西村　弘敬　西尾孫太郎　観世　元信
西村　欽也　林　寿一　藤田大五郎

間　佐藤　秀雄

瓜盗人　茂山弥五郎　茂山　喜三
観世　静夫
観世鉄之亟

砧　松本　謙三　吉見　嘉樹　藤田六郎兵衛
田鍋惣太郎
間　河村　丘造

谷　大作

喜多　実

舟弁慶　西村　欽也　安福　春雄　鬼頭　八郎
高安　滋郎　田鍋惣一郎　金森　準三
和泉　太郎
間　佐藤卯三郎

第二部　能組（午后四時始）

高砂　金春　信高　永田虎之助　野崎　太郎
青木　恒治　小島鉄次郎

金井　章
新井　桜
前田　正人
帆足　正規
馬場富四夫
相原仁兵工

辰己　清
同山　渡辺　三郎
子方　辰己　孝門
宝生　九郎

安宅　松本　謙三　安福　春雄
田鍋惣太郎　藤田大五郎

迎年之舞
貝付貝立

間　茂山幸四郎
茂山　喜三

悪太郎　佐藤卯三郎　河村　丘造
歌村彦四郎

本田　秀男

道城寺　高安　滋郎　吉見　嘉樹　観世　元信
三須　錦吾　藤田六郎兵衛
井上松次郎
井上礼之助

間

主催　朝日新聞社
能楽協会名古屋支部
後援　能楽堂

狂言解説

瓜盗人（うりぬすびと）大蔵流

盗みに罪なく瓜に罪あり……真夏の瓜畑はまことに魅力のあるものです。なに気なしに一つ二つ失敬した瓜を、出入先きの旦那衆に手作りの瓜でござると進上した、ところが旦那はこれはよい風味の瓜だや、手作りならば今少し呉れいとの仰せに、致し方なく心ならずも二度三度とくり返すうち、最初はカガシを人と思い驚いて、ほう〳〵の体であやまつたりなどしたが、二度目は畑主がカガシになつているとも知らず、カガシを罪人に見立て自分は鬼のつもりで責めて見たり、自分が罪人になつて責められて見たり……面白がつて戯れているうちに遂ひにばれて畑主に追い込まれる。

弥五郎氏の円熟した仕科に対するに、喜三氏の畑主でがつちりと組んだ、たのしめる狂言であります。

悪太郎（あくたらう）和泉流

酒くせのわるい悪太郎と云うならず者あり、伯父が蔭口をきくとあつて大長刀を持ち伯父の宅へ抗議に行きます、伯父もうるさいので酒を振まう、悪太郎よいことにして長刀を振りまわしていやがらせをしてかへる途で酔つぶれて寝込んでしまいます。

伯父は悪太郎が余り酔うてかへつたので、心配をしてようすを見に参ります街道に寝ている悪太郎を見付け一策を案じソット長刀を取りあげ、頭を剃つて坊主の姿にする、枕元に立つて「ヤイ〳〵悪太郎、汝日頃悪心なるによつてかようの姿となす、今日よりしては善心となつて後生を願へ、即ち汝が名を南無阿弥陀仏とつくるぞ、エーイ」と云い残して立ち去ります。

悪太郎は夢うつゝのうちに是を聞い

て、目をさましたところへ坊主が南無阿弥陀仏〳〵と念仏を唱へて出て来ます。悪太郎は自分の名を呼ばれたと思い返事をする。坊主は合点ならずもかまわず念仏を唱へる又返事をする。とう〳〵踊り念仏まで発展すると云う狂言のうちでも傑作の一つであります。悪太郎は卯三郎氏が得意の出しもの、これに療養中の彦四郎が伯父を買つて出る、落ちついた丘造氏が坊主で助演する、名古屋に残る古典芸術和泉流の伝統を御覧下さい。

安宅、貝ノ論（古書検）

歌村彦四郎

（古書検として本紙に掲載いたしますものは、家元「秘伝聞書」よりの抜粋で、今日まですべて未公開のものであります）

文化七年のころの聞書に安宅の貝について論しております。

一、舞ノ内ニ扇ニテカイトリト云仕方有由、扇ニテ腰ニ貝附タル仕方之様子全躰山伏ハ腰ニ貝附ル物ノ由、吹貝ハ大キナル貝又腰貝ト云テ小サキ貝ヲ腰ニ附ル事ノ由全躰大キナル吹貝ガ専ナレ共其例ニテ小サキ貝ヲ腰貝ト云テ腰ニ附ル事然リ、是山伏道ノ事也、年頭ニ山伏御目見ノ節腰ニ貝附有之也、安宅ノ山伏モ右ノ心トミエタリ。

右貝ノ事日潤上人ノ物語ニハ山伏ハ総テホラ貝ヲ持物ノ由、経文ニモ法螺ト云事アルト也、右貝ヲ持趣意ハ山伏ハ沙門同様ニテ野ニ伏前後合図聞合ノタメノホラ貝ノ由也、サルニヨツテ皆山伏ハホラ貝ヲ持フク也、尤ホラ貝ハ小サクテモ大キクテモ音ノ大小ハ同事ノ由却テ小サキ唐貝抔ハ別テ音モヨク遠音サス物ノ由、サレバ腰貝ハ小サクテモ吹為ニハヨロシキト也、尤ホラ貝ハ此行ニカギラズ仏道ニモ用ユル由入用筋ハ山伏ニ同ジ、又山伏斧持事ハ荘ニアラズ、カノ出中専ラ徘徊スル物ナルニヨツテ右斧ニテ障ノ木未ヲ切払為也、当時用ユル殊ノ外大キナル斧ハ後ノ事ニテ畢竟用ニハナリガタクナガメノミニテアルベシト也。

一、強力（聞狂言）狂歌について

山伏はかひ吹てこそにげつらめ
　たれおいかけてあびらうむけむ

此ノかひふいてこそノかひふくト云事ハ、物ニ負ケタル時ノ俗言ノ由、尾州杯ニテハアマリキカズ関東、下総ノアタリニテハ専ラ云ヨシ勝負ニ負タル事ヲかひふいたト云由、博打ニ負タル者ナドヲ「カヒフイテニゲタ」ト云由其俗言ヲ山伏ノホラ貝ニカケテ云タル事ナルベシにげつらめハニケタヂヤアラウ也、

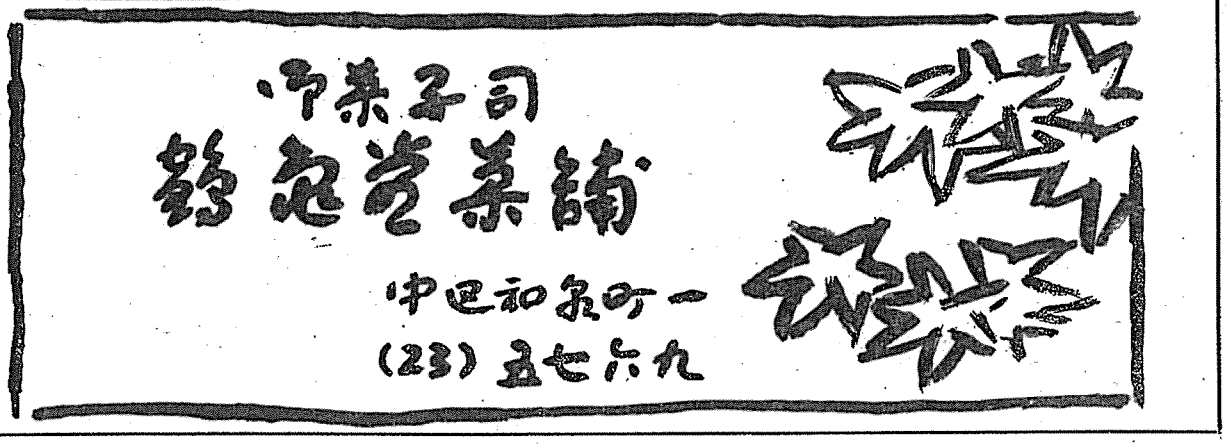
たれおひかけてハ人ノ追掛意ニ山伏ノ笈ニカケテ云タル事ナルベシ、あびらうむけむハ経文ニテ、聊天運ニカケテ云タル事ナルベシ。

第六回学生能全国大会 京都大会を迎えて

名大　長瀬　寛治

能狂言に対して学生達の間で関心が高まつたのは歴史的には古く、既に戦前に東京で宝生流学生連盟が出来ていたと聞いております。それが、太平洋戦争の勃発と共に一時中止しておりましたが、終戦の声を聞くと共に、熱心な同志達の間で学生連盟再興の動きが開如され、そのうちに全国各地の大学でも同志がふえて来るにつれて、連盟はそれらを翼下にかゝえていつたので、組織も漸次大きくなり、遂に昭和二十九年には、第一回宝生流学生能全国大会が東京水道橋能楽堂で催されるに到りました。次いで第二回京都、第三回金沢、第四回東京、第五回名古屋、と回を重ねて参りまして、本年六月十三日（土）、十四日（日）の両日に、京都で第六回目の全国大会が開かれようとしております。参加校も二十余校を数えておりますが、名古屋（名古屋学生宝生会）からはOBも若干加えて約九〇名が参加する予定で、大会全参加者数の半ば近くを占めております。この数からも判りますように、名古屋の学生達の能狂言に対する関心は、「芸所名古屋」の言葉にふさわしい程、極めて高いのであります。現に昨年第五回大会が名古屋で催されたのを見ても、この事が一層強く裏付けられるのでありまして、名古屋の学生の意気がここに如実に顕われているのであります。一寸、名古屋学生宝生会について概観してみますと、当会発足して既に五年を数え、参加校は今では名大、南山大、県立女子大、市立女子短大及び金城大の五校でありまして、月に又は二月に一回の割合で、寺、師匠宅の舞台等をお借りして、例会を開き発表し合っております。当会の将来については、今日のような著しい学生数の増加はやがて師匠の数とのバランスを打ち破ってしまうのではないかという懸念がありまして、この点幹事会でも問題になつているようです。

京都大会第一日目は、午后一時半から始まり、先ず京大教授井島勉氏の「現代学生と伝統芸術」と題する講演があり、次いで辰巳孝氏の能「半蔀」、茂山七五三氏らの狂言「水掛聟」及び宝生英雄師の能「阿漕」その他仕舞が予定されております。第二日は、午前八時から、能は地え同志社大「玉葛」及び京大「土蜘」の二番、狂言は名大「狐塚」、南山大「文山賊」及び京大「筍」の三番及び舞囃子十番、連吟仕



舞多数となつております。

最後に、狂言に対する学生間の関心について私見を述べる事が許されますならば、謡、仕舞に対するそれに比してその度合が低いようです。主たる原因としては、狂言は、謡、仕舞のように観客なしに一人で楽しむという事が出来ない事があげられると思いますが私共狂言を愛する者にとりこの点残念に思つております。既に先日の「朝日狂言会」において徳川義親氏が云つておられるように、狂言の「小謡」の普及は、狂言の普及に或る程度の効果を期待出来るのではないかと思います。

狂言不審紙より

心その業にみちて狂言の能になり狂言の歌舞伎ともなる我慢の心をすて生しまゝこそ業の愛度なるべけれ

しら露のおのが姿をそのまゝに
紅葉におけばくれないの玉

師は針の如く弟子は糸の如し子の悪鋪姿はおのれをかべりみよ。ふるき歌にも

我身をば我程たれか思ふべき
我に安して我に教えよ

一犬形に吠レバ萬犬声に吠ル一犬虚ヲ伝レバ萬犬実ヲ伝フ

実を教実を習ふこそ専要なれつれ〳〵草九十二段に云。弓射る事を習ふに諸矢手挾て的に向ふ師の云初心の人ふたつの矢を持事なかれ後の矢を頼て初の矢に等閑の心あり毎度たゝ得矢なく此矢一箭に定へしと思へと言、わつかに二の矢師の前にて一つを愚にせんと思はんや懈怠の心自知すと云共師是を知る此いましめ萬事に渡るべし道を学する人夕には朝あらん事を思い朝には夕あらん事を思いて重ねて念頃に修せんことを期せり下略似たるは拙なし似さるも拙なし唯芸は眼なり眼は腹に有、腰に有、心は脩下にあり、扇子に生死有、五行有、心得べし、業に仕舞つく詞有言葉つく仕舞有、拍子つくあり、歌にも、

狂言に拍子繁くて渋つらは
みなたはものゝ業と知るべし

声にきれこえもろ乱声等有、宮商角徴羽備りし社いとめてたけれ歌に

我声の出はつかいていろを出せ
出すは声に遣はれやせん

と聞く時は遣ふともつかはるゝ共生れ性なり、くゆるにたらん、一節二声という業に気の掛る社専一なれ　以下略

楽師協議会よりのおしらせ

一月十一日　学生能に木全淑子さんは雛子吉野天人を舞ふ（河村鉦二社中）

四月廿五日　九皐会に梶田俊氏は囃子西王母の笛を披く（金森準三社中）

五月二日　濤名会に有賀志計さん囃子大鼓を披く（西尾孫太郎社中）。永田恵一氏は囃子小鼓を披く（青木恒治社中）

五月三日　松謡会に大森英三郎氏は囃子猩々の笛を披く（筧三男社中）佐藤太俊氏は能翁を披く（林愿蔵社中）

五月三日　鶴声会に小沢雅弘氏。山口正男氏。棚橋ふさへさんは何れも囃子のシテを披く（丹下三義社中）

五月十日　北村勇夫氏は素謡、卒都婆小町を披く（柴田初太郎社中）

五月十七日　霞会に杉浦喜美穂さんは囃子桜川のシテを披く（内藤泰二社中）

五月廿四日　たなびき会に後藤幸一郎氏は能翁の小鼓の頭取を（田鍋惣一郎社中）吉田定男氏は能翁の大鼓を披く（西尾孫太郎社中）

四月廿九日　観正会に安井英雄氏は素謡砧を披く（久田秀雄社中）

——舞見御中暑——

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
博勝会　山田達
藤門会　加藤良久
長生会　鬼藤八郎
龍吟会　藤田六郎兵衛
霞会　田鍋惣太郎
潤水会　林愿蔵
観水会　野崎太郎
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎
名古屋能楽倶楽部　植村真太郎
風韻会　殿鳥修二

幸友会　福井啓次郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金龍会　金森準三
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤錠太郎
松謡会　佐藤太後
祥雲会　永田虎之助
清風社　大塚一二
掬水青陽会
社団法人 能楽協会
名古屋支部　支部長　田鍋惣太郎
中部能楽師会　理事長　西村弘敬

狂言共同社

狂言

昭和34年9月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
非上兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社同人
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1196

狂言人語

共同社　歌村彦四郎

催しもあまりないまゝに「狂言」も七、八月は恒例によつて休刊いたしました。九月号よりはペンを改めて「ヘラズグチ」をたゝきます、相かわらず御愛読の程を。

皇太子御成婚祝賀能

去る八月十五日、能楽協会名古屋支部、朝日新聞社共催にて県文化講堂仮設舞台に開催、協会理事長宝生宗家の特別参加を得て、左の番組通り地元師範総出演千六百人余を動員大成功を納めました。

番　組

能　羽衣　宝生九郎　西村弘敬
囃子　松虫　他一番
狂言　棒しばり　井上松次郎　河村丘造
　　井上礼之助
能　小鍛治　柴田初太郎　高安滋郎
　　佐藤秀雄
問

今後も毎年大衆能として、何等かの形式により皆さんにアッピールしたいと、能楽協会名古屋支部では計画いたしております。そのおりは又御賛助の程をお願いいたします。

茂山忠三郎氏の死を悼む

大蔵流狂言方の名手、茂山弥五郎氏の義弟で弥五郎氏とゝもに狂言の古格を守り、大蔵流の重鎮であつたが、七月二十九日遂に永眠された、八月二日京都に於て茂山千五郎氏委員長となり盛大に本葬が営まれました。

当地にては三十一年共同社主催東西狂言大会に来名、時既に体の自由を欠き小舞「通円」を舞はれたのが最後であつた。

同氏は又水泳小堀流の師範で、ターザン映画で有名な元オリンピック選手ワイズミューラーが訪日したさい、クロールと抜手で試合をしたこともある。

謹んで弔意を表するとゝもに、嗣子倖一氏の芸道精進をお祈りする次第であります。

野村又三郎氏名古屋移住について

もと野村家は、三宅家とともに和泉流の師家として代々家元より一派を許されていた家柄で、先々代、先代、ともに名古屋との往来繁く、共同社との因縁浅からぬものがあります。

応召中先代を失い戦後、又三郎氏の存在は、まことに同情すべきものがありました、これを聊かでも援護する意味に於て、時おり名古屋への出演の機会を作つて参たのであります。

然るに昨夏ある私事のため、好意を寄せる私共の意に解せぬ事態を生じましたので、止むを得ず事の解決するまで、一時交渉を絶つことになつたのであります。

私共は同氏将来のため中央在住が得策と思い之を希つて来たのですが、いかなる成算によるか今回名古屋へ移住をされました。

これに就て協会名古屋支部長田鍋惣太郎氏は、今日までの我々との絶交状態を憂へ、同流の者が二ツに割れてゐることは芸道のうえにも好くないと切なる斡旋に動かされ、且、又三郎氏のこれまでの釈明もあつたので一応諒解することとして旧交に復した次第であります。

就ては今後は共同社の客員の一人としてむかへ、当地に於ける狂言の交渉については共同社一本の窓口として、流儀のため、ともに研究精進することになりました、何卒皆様の理解ある御後援と御鞭撻をお願いいたします。

能楽野球チームの優勝

今夏、西川、名放劇団、名鉄ホール、CBC芸能が集り金鯱会を組織しリーグ戦を展開、能楽チームが優勝の栄をかちえたさうです、まことに御同慶の至りであります。

然しメンバーを見ると殆どがやとわれ選手で、勝つた／＼も割り切れないものがあります、負けても勝つても抱泥なく本来のレクリエーションとして本当の能楽チームが作つてもらいたいものです。

「ムツカシ」と「ムヅカシ」

狂言二十六号に「六ケ敷い」の発音はムツカシイかムヅカシイかとの質問のことがありました、私共は子供の時分からムヅカシイと教えられて来ましたのでそう発言しております、幸い太鼓の山口義郎氏から文献を得ましたので掲載いたします。

太鼓方　山口義郎

狂言第二十六号六ケ敷いについては地方の方言は判りませんが、大島正健著「国語の語源とその分類」第八章、麻行音の諸語第三節ムの類二ムの雑話

ムヅク（憤）は古言にてむづ〳〵と気に障りて憤るなり、今はムヅカルと云ふ、ムヅカシキは気に障りて厭はしき状態を為す形容詞なり、転じては心に入り難く解き難き義と為る。

大槻文彦著大言海第四巻五五頁、むつかし、憤（ムツカ）るヨリ転じタル語ト云フ、俗ニむづかし。

枕草紙ハ、第七十八段、十一、第百四十五段にはムツカシとあり。言葉にて当てるべき字なし、六ケ敷と書けばムツカシ、憤しなればムヅカシ。

地方によるナマリ又は方言的な呼び方は判りません。

そこで私も落合直文著「ことばのいづみ」を見ましたところ「むづかし」煩厭、きたなげなり。いとはし。わずらはし。うるさし。面倒なり。源「いなかなどは、むづかしきものとおぼしやるらめど」「六箇敷」俗にむづかしい。㈠事入りくみて解き難し。成就し難し。なすに難し。㈡病危し。容體悪し。病気さし重れり。㈢むづかしの略。

とありむつかしとはないようです、やはり言葉としてはムヅカシがよろしきかと思はれます、現在では新聞、雑誌等もむずかしとのみ使用されておるようです。

九月の動き

九月六日　招待能　一部　午后一時
養老　片山博太郎
狂言　萩大名　河村　丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎
能　半蔀　シテ杉浦　義朗　ワキ西村　弘敬　佐藤　秀雄
二部　午后三時半
弦上　畑　富次
狂言　仏師　井上礼之助　野村又三郎
能　殺生石　シテ片山　博通　ワキ高安　滋郎　佐藤卯三郎
九月二十日　清風社　袴能
能　班女　シテ大塚　一二　ワキ高安　滋郎　井上松次郎
九月二十四日　鳳鳴会　午前九時半始
能　屋島　シテ山本　一　ワキ西村　弘敬　大野　博之
能　藤戸　シテ伊藤　良子　ワキ高安　滋郎　佐藤卯三郎
狂言　柿山伏　石田　喜樹　井上松次郎
九月二十七日　先代藤田清兵衛追善
能　乱　殿島　修二　ワキ西村　欽也
能　松風　シテ倉本　雅子　戸田　和子　ワキ西村　弘敬
能　望月　シテ佐藤　太俊　ワキ高安　滋郎　佐藤卯三郎
狂言　魚説法　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

萩大名＝在京の田舎大名、下京辺の太郎冠者の知人である茶屋へ萩見物に行く、兼ねて示し合せて、茶屋の亭主の求める当座に「七重八重九重とこそ思いしに十重咲き出る萩の花かな」の一首を太郎冠者の扇のリードで詠むはづだつたが、十重咲き出づるでハタとつまつてサア大変、太郎冠者にまで逃げられる大名の最後の切抜け策は……。

柿山伏＝羽黒山よりの帰山の山伏見事に成つた柿に渇を癒やさんと柿に登つて食う所へ柿主が出現、あわてゝかくれる山伏を、犬ぢや、猿ぢや、と、散々なぶる柿主。とゞのつまり鳶にたとえられて、飛び降りた山伏。さてこのおさまりは……。

魚説法＝住持の留守を預かる新発智。折柄申込まれた法談を断ればよいのにお布施に曳かれて、つい引受けてさてしらぬ説法に魚の名をつらねてごまかそうとは、施主の怒りに「こちや只飛魚〳〵」……。

佛師＝持仏堂を建立した田舎者。仏を頼まんと都へ出る、通り合はせたスツパ（悪者）が自分が仏師だとだまして金をとるさて渡すべき御仏になりすましたスツパ。御印像が気に入らぬと仏師を探す田舎者、さてこのおさまりは。

狂言置鼓

狂言置鼓は狂言方の秘事なり「能楽」誌の照合に対する返書にこう記されている。

一、和泉流一子相伝狂言置鼓の事

一、狂言置鼓は邯鄲傘の伝。翁附の脇能に出たる時狂言置鼓にて出る事大切の習なり。森田庄兵衛流には真の音取を吹き又平岩勘七流には脇能の音取を吹なり。平岩流には名乗足の笛吹かず森田流には名乗足の笛吹なり。右は狂言方の大秘事なれば狂言方より好まぬ時は何れの流義にても音取を吹き申さず。狂言方望み次第なり。但し音取なしに鼓斗りにて勤める事も有之候。

一、大鼓の打様は流に依り替りあり。頭打たず「オツ」の止めもあり。又打切の止めも有之候。右小鼓とても前同様。狂言方より好まぬ時は打不由

一、大鼓石井孫三郎流に狂言置鼓に打様あり。是も狂言方より好にて相整うものなり。

一、置鼓は邯鄲口開、是れ置鼓の始なり。此外に置鼓口開勤る分は、皇帝、西王母、鶴亀、鷺、東方朔、感陽宮以上七番に限るべきものなり。

一、凡て狂言置鼓の伝は家元一子相伝なる故に弟子家へ伝へたる事。多分なき事なり依つて当時は、置鼓の名をさへ知らぬ人数多有之候。

右は拙家伝来の書記を写し差出し申候委敷事は秘事なる故相省き申候。右御承知被下度候。

和泉流岳楽軒より第十三代
明治三十七年八月　山脇　元清

十月の予告

十月四日　田鍋能　京都観世会館
養老　片山　博通
水波ノ伝
能　正尊　金剛　巌
能　道成寺　杉浦　義郎
狂言　萩大名　河村　丘造　井上松次郎　佐藤卯三郎
狂言　業平餅　茂山　倖一　茂山千五郎
十月十八日　清韻会能
能　天鼓　赤間　鎮雄　井上松次郎
能　井筒　泉　嘉夫　高安　滋郎　井上礼之助
能　夜討曽我　大槻　秀夫　殿島　修二
狂言　栗焼　佐藤　秀雄　佐藤卯三郎　市橋　良治　山本光次郎
十月二十五日　名匠鑑賞能
能　経政　梅若　六郎　福玉茂十郎
能　千手　〃　観世鉄之亟　〃　武雄
狂言　伯母ケ酒　野村又三郎　井上松次郎
嚏子　玄象　大江又三郎
能　卒都婆小町　観世　喜之　福玉茂十郎
能　小鍛冶　本田　秀男　河　丘造

登録商標
尾張名古屋は
城で餅
登録商標
御千代寶
登録商標
秋の錦
中区宝町一丁目
名古屋
亀末廣
電⑨局三二〇三
三四四六

狂言

昭和34年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1190

狂言人語

共同社　歌村彦四郎

田鍋惣太郎舞台六十年記念京都能

さきに東都に、今春は大阪に各記念能を催され、今又京都に開かれることは誠にその努力に敬服のほかありません、左記の如き立派な番組であります、今回は共同社も参加いたしまして「萩大名」を演じます、盛会のことゝ存じます。

番　組

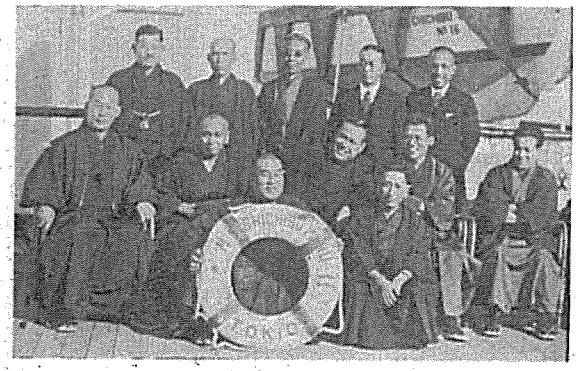
養老　片山　博通
萩大名　河村　丘造　井上松次郎　佐藤卯三郎
道成寺　杉浦　義朗
業平餅　茂山　倖一　茂山千五郎　外大ぜい
正　尊　金剛　巌

三十年前に海外公演

田鍋氏の偉業の一つに思い出されるのは三十年前の上海演能であります。昭和五年十一月廿九、卅の両日、同地演芸館に、本格の仮設舞台を設け同氏の斡旋で、シテ方内藤鰛造、柴田初太郎、斉藤安次郎、ワキ方西村弘敬、ハヤシ方田鍋惣太郎、田鍋惣一郎、青木恒治、藤田六郎兵衛、金森準三、西尾孫太郎、狂言方井上新三郎、歌村彦四郎計十二名、田鍋惣太郎氏を団長として当時最大の豪華船秩父丸（一八、〇〇〇トン）に神戸港より乗船サツソウとして上海に乗り込んだのであります、そのときのようすは凡そ御想像のつくことゝ思います。

当時上海には宮本靖二氏が大きな料亭を経営され、同氏の一方ならぬ熱意によつて実現されたようです、観世、梅若、宝生の師範の方もおられ謡は居留民のうちに盛んでありました、此の人々に非常な歓待を受けまして、ほんとうにたのしい思出になりました。

同行の面々は先刻御承知のとおり、船中と云わず上海においても、かず〳〵の奇行やら失敗を演　したがこの発表は又の機会にゆづりまして、田鍋氏のいつもたゆまぬ努力をたゝえるとゝもに、ふと三十年前の若かりしころを思い出したまゝに。



秩父丸船上の一行

十月の動き

十月四日　颯々会、素謡会
十月十一日　杏謡会、素謡会
十月十八日　清韻会能
能　天　皷　赤間　鎮雄　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　井　筒　泉　嘉夫　高安　滋郎
間　井上礼之助
能　夜討曽我　大槻　秀夫
殿島　修二
間　大藤内　佐藤卯三郎　市橋　良治
狂言　栗　焼　佐藤　秀雄　山本光次郎
十月二十五日　名匠鑑賞能
能　経　政　梅若　六郎　福王茂十郎
能　千　手　観世鉄之亟　観世　武雄　高安　滋郎
狂言　伯母ケ酒　野村又三郎　井上松次郎
（囃）玄　象　大江又三郎
能　卒都婆小町　観世　喜之　福王茂十郎
一度ノ次第
能　小鍛冶　本田　秀男　高安　滋郎
間　河村　丘造

狂言解説

佐藤　秀雄

栗焼＝来客の為到来物の栗を焼けと云付けられた太郎冠者、余り見事な栗に魅せられてつい一つ二つと四十個の栗を皆食べて仕舞う、窯の神と三十四人の公達を持出したが後の残り四個の云訳につまつて……。

伯母ケ酒＝酒屋に伯母を持つた男、吝い伯母を欺して酒を飲もうと種々にとりつくろつて頼むが飲めとは云わぬ伯母に業をにやし鬼が出るとおどしておいて自身鬼になつて伯母の家へのりこみ、腹一杯酒を呑んだがよつぱらつて……。

舟弁慶、間

歌村彦四郎（古書検）

（古書検として本紙に掲載致しますものは家元伝来の「秘伝聞書」よりの抜萃で、今日まですべて未公表のものであります）

文政七申年四月廿八日

禁中ニテ公弁慶間相勤ル脇方ハ宝生流山田覚右衛門右方ト申談ジ之上、中入ノ内脇トノ雑談相済直ニ片幕ニテ楽屋ヘ入用意ス、脇、立さわぎつゝ船子共ノ次、お舟を出し候ヘト、楽屋ヘ向云狂言ハ舟ノ胴ノ間ニノリ、カイサホ持添、片ヒザ付見合居、脇ノセリフニ不抱、舟子共相済ト直ニ幕揚サセ、ジツト聞、立チスラ〳〵ト船持出ル、右ノ具合ニテ脇後見座ヘクツログ、邪摩ニナラズ行違ニナリ、謡ノハテヌ内ニ船、脇座ニ置、急きお舟に召され候ヘト云、尤謡ハテニ引掛テ云也、船ノ置所、大夫木下正三郎ニ、好ハナキ哉ト問合候処、何モ好ハナキト云、然ラバ船ノ輪ヲ舞台一パイニ成丈同音ノ前ヘ寄セ、真直ニ置心得ニテ候ト云、付テハ右之通置候上、大夫方ヨリ舟ヲアチラコチラ、ウゴカシ候テハ見苦シク、狂言方モ迷惑ニ候ヘば、差掛左様ノ事無之為ニ申談ジ候事ト、猶更念入置候処、差掛同音之者舟ヲ上ヘ引ヨセ候ヘ共、兼テ引合置候事故狂言ハ更ニウゴカズ候ニ付、舟モ思フ様ニウゴカズ、脇ズレアヤクシ迷惑ス、尤成丈同音ノ前ヘヨセ候心得ニテモ、脇ヅレノ内アヤカシ一人ハ同音ノ前ニ居候故、アヤカシ丈ハヨラズ、此ノ相対ハ大夫ト脇ト談合ナリ、右ノ通約束相違ニ付、相済候上、正三郎ヘ同音ヨリ舟ウゴカシ候子細、手前方約束相違ノ子細問合候処、其ノ節舞台ノ様子只今不明ニ付、得ト吟味致シ口上ニテ申聞ニ付、夫成

ニ致シ置候処、追而正三郎申聞ニハ、得ト吟味致シ候処全ク同音ノ者ノ不調法、失敬之旨挨拶有之付テハ、片山九郎右衛門等共申合候ヘバ、以来加様ニ舟ニ手ザシ候儀ハ致サセマジキヨシ申聞ル。

附全体右之所ハ脇方ニモ心得アリテ、アヤカシ共ニ同音座ノ次ヘ成共クツロガセタキ物也、併其ノ役方ニ心得ナケネバ致シ方無也。

「お茶と狂言」（一）

佐藤卯三郎

お茶と狂言との関係は、今改めて申迄もなく両者共に東山芸術の一つで、即ち室町時代に文化の大成と共に完成された芸術であろう、所謂東山時代の文化を生んだ足利義政の風流と其趣味に徹した治世の現われと言えよう。

此狂言と言う言葉は現在歌舞伎・所作事等にも用いられて居るが、文字から言えば一種の滑稽劇の代名で其起りは古く奈良朝時代に支那大陸から仏教の伝来と共に工芸美術がもたらされた。此時娯楽物として猿楽が輸入された。即ち歌舞・音曲・曲芸等のもので其当時猿楽は主に仏事法会に用いられた。之に我国個有の滑稽芸が取入れられ民衆の好みに適する歌舞として発達し今迄国内で行われて居た田楽等の滑稽歌舞（わざをぎ）は廃せられてこの猿楽（散楽）が之に代わるものとなった。平安・鎌倉・吉野と時代の変遷に伴い洗練され室町時代に至つて文化の大成と共にこの能・狂言も完成され優雅な舞台芸術が生れたのである。

能は猿楽の歌舞音曲を取り入れ優雅なる而も厳粛な舞台芸術として発達し之に相対して狂言は猿楽本来の滑稽味のものが更に洗練されて出来たものでこの性質の異なつた能と狂言が同じ舞台で一組となつて演ずるというのは能に依つて緊張した気分を狂言によつて一時転換し又次の能を見るという組織であろう。豊臣時代には是を定めとされた催能の記録によると寛正五年四月「礼河原勧進猿楽の興行」が行われ約二十番立ての能・狂言が催され将軍義政及び公家武家が美しくこれを見物した、斯様に貴族に賞愛されて民衆娯楽として民衆を離れて行く傾向を示した。

織豊時代になつても武家に重用され、文禄二年十月五日紫宸殿前の御能に秀吉は家康・利家と共に耳引（改口真似）狂言を演じた徳川時代には幕府の式楽となつて全く武家の専有する芸術となつた。

（次号には流派、作家、題材、登場人物、舞台構造形式等について続掲いたします）

十一月の予定

十一月一日　婦人師範聯合会、素謡会

十一月三日　博勝会

能　葛城　加藤歌子　高安滋郎

大和舞　山本光次郎

能　三井寺　村田京子　西村弘敬

井上礼之助

井上松次郎

狂言　杭か人か　河村丘造　佐藤卯三郎

十一月八日　観世会

能　景清　島沢啓次　高安滋郎

能　三井寺　武田太加志　西村弘敬

井上礼之助

狂言　鍋八撥　井上松次郎　佐藤卯三郎　河村丘造

能　紅葉狩　浅見重信　高安滋郎

佐藤友彦

佐藤秀雄

十一月十四日　掬水青陽会

能　放下僧　佐藤太俊　西村弘敬

井上礼之助

能　百萬　加藤丈太郎　西村欽也

井上松次郎

能　葵上　観世武雄　高安滋郎

大野弘之

狂言　宗八　佐藤卯三郎　河村丘造　市橋良治

十一月十五日　幸友会

十一月十八日　狂言やるまい会

（野村又三郎主催）

雁礫　河村丘造　佐藤秀雄　佐藤卯三郎

布施無経　野村又三郎　井上礼之助

法師ケ母　野村又三郎　野村万作

木六駄　野村万蔵　井上松次郎

野村又三郎

歌村彦四郎

唖の一声　野村万之亟　野村万作

野村又三郎

十一月二十一日　霞会、雛子会

十一月二十二日　竹韻会

能　蟬丸　大槻秀夫　高安滋郎

野村又三郎

能　熊坂　西村欽也

佐藤秀雄

狂言　しびり　石田喜樹　歌村彦四郎

十一月二十三日　能楽クラブ

能　舟弁慶　水藤又吉

井上礼之助

狂言　太刀奪　市橋良治　山本光次郎　大野弘之

十一月二十八日　茲水会

能　砧　有賀滋子　西村弘敬

佐藤卯三郎

能　舟弁慶　森川みどり　高安滋郎

井上松次郎

狂言　竹生島参り　河村丘造　佐藤秀雄

十一月二十九日　掬水会

能　鶴亀　柴田収　西村弘敬

佐藤秀雄

能　三井寺　植村与太郎　佐藤卯三郎

河村丘造

狂言　蜘盗人　井上松次郎　井上礼之助

楽師協議会だより

九月二十七日、近藤努氏囃子でシテを披く（殿島修一　宅中）

商標　登録　花甚　株式会社

花甚

直売店　駅前豊田ビル一階　TEL㊺4587
名古屋駅表玄関　TEL㊺9078

温室　千種区猪高町西一社　TEL（猪高）25

東新町電停東　CBC放送局西隣
TEL㉔0487・5296

狂言

昭和34年11月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上瓢兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1190

狂言人語

共同社
歌村彦四郎

一、伊勢湾台風

風速四十五メートルと云う未曽有の台風の来襲に、相当の被害をうけない方はないと存じます。謹んで御見舞申し上げます。

一、伊勢湾台風義援能

さて漸くにして被災者の救援もすすみ、復旧にも明るい目途がつき、人心もいくらかおちつきを取りもどしたようであります。

能楽協会名古屋支部に於ても此の際立ち上り在名楽師は勿論、当地に縁故の深い諸先生の御快諾御奉仕を得て、別記の通りの豪華な番組を編成「伊勢湾台風義援能」を開き、救援の一助にもいたしたいと存じます。

なにとぞ皆さま御賛同の上御誘い合され御清鑑の程を御願い致します。

一、中央の狂言だより

狂言ばかりの会が東京でひんぱんに行われました。中には珍らしい芸妓連の会などもあります。

一〇、六　深井能楽堂　万蔵の会
鱸包丁　野村万蔵
悪太郎　三宅藤九郎
闘罪人　野村万蔵

一〇、一三　観世会館　新泉会
三宅藤九郎氏門下で今秋直木賞受賞の女流作家平岩弓枝嬢はじめ新橋芸妓連による、狂言小舞、狂言「鉢叩」などが演じられた。

一〇、一五　白木屋　白木狂言会
入間川　野村万之丞
右流左止　三宅藤九郎
盤山伏　野村万蔵

一〇、二八　深井能楽堂弥五郎翁を囲む会
井礎　大蔵弥太郎
業平餅　茂山弥五郎

伊勢湾台風義援能

日時　昭和三十四年十一月二十一日（土）
場所　熱田神宮能楽殿

第一部　午後一時始

辰己　孝
（宝生）能　枕慈童　西村弘敬
（和泉）狂言　杭か人か　佐藤卯三郎　歌村彦四郎
（金春）舞囃子　羽衣　本田秀男
（金剛）仕舞　殺生石　大塚一二
（喜多）独吟　鶴　二井栄逸
（観世）仕舞　玉之段、橋岡久太郎
大槻秀夫
（観世）能　土蜘蛛　高安滋郎
間　佐藤秀雄

第二部　午後四時半始

後　柴田初太郎
前　観世武雄
（観世）能　田村　西村欽也
（和泉）狂言　太刀奪　河村丘造　井上松次郎　井上礼之助
（宝生）仕舞　笠之段　内藤泰二
（金剛）舞囃子　紅葉狩　山田仁三郎
観世喜之
（観世）能　融　高安滋郎
主催　能楽協会名古屋支部

十一月の動

十一月八日
能　観世会
能　景清　シテ鳥沢啓次　ワキ高安茲郎
三井寺　シテ武田太加志　ワキ西村弘敬
間　井上礼之助
能　紅葉狩　シテ浅見重信　ワキ高安滋郎
間　佐藤友彦
佐藤秀雄
狂言　鍋八撥　佐藤卯三郎
井上松次郎　河村丘造

十一月十四日　掬水青陽会
能　放下僧　シテ佐藤太俊　ワキ西村弘敬
間　井上礼之助
能　百萬　シテ加藤丈太郎　ワキ西村欽也
間　井上松次郎
能　葵上　シテ観世武雄　ワキ高安滋郎
間　大野弘之
狂言　宗八　佐藤卯三郎
河村丘造　市橋良治

狂言解説

鍋八撥（なべやつばち）

都に新しいいちが出来るについて、一の店を出したものには市司を仰せつけられるとあつて、かつこ売が登場します。まだ夜も深いので一寝入りするうちに、一足遅れて鍋売が来てソツトかつこ売の場へ鍋をおいて占領せうとします、かつこ売が目をさまして争いになつて、土地の目代が中に入り、何か勝負して決めることになり、かつこを打つことになりました。鍋売は鍋をかつこにして舞い鍋を打ちくだいてしまいます。

此の狂言は笛のおあしらいで「かつこ」を舞ひます。しばらく上演いたしませんので研究のため上演しました。

宗八（そうはち）

もと料理人の坊主と、もと坊主が還俗して料理人になつたものと二人が、有徳な人に抱えられます。主が外出にあたつてそれ〴〵に応じた用を云いつけて出かけました、両人のものは入れ替つて坊主が手際も鮮かに魚を料理し、料理人がタテ板に水を流すようにお経を読むおもしろさ。

この狂言も久しく出ませぬので、小道具を新調いたしましての上演であります。

杭か人か（くひかひとか）

臆病者の太郎冠者があまり強がりを云ひふらすので、主は二、三日の予定で去る方へ行くと云つて鎗を用心に与へ、よく留守番をするよう云ひつけて出かけます。

太郎冠者は感心に夜廻りには出ましたが、主が立つているのを盗人と思い込み、宝物の有りどころを教へませうほどに、命だけはお助けなされて下されと只管哀願いたしますが、その結末は……

太刀奪（たちうばい）

北野へ参詣に出た主従二人、通りかかつた他家の奉公人が見事な太刀を持つているのを見て、太郎冠者が太刀をとろうとして却つて主から預かつた刀を取られます。

奉公人が帰りにもここを通ると言つたので、主従の二人が待ちかまえて奉公人を捕え、まんまと縄でしばつた筈だつたが……

「お茶と狂言」（三）　佐藤卯三郎

流派＝大蔵、鷺。和泉の三流があつたが、現在では大蔵、和泉の二流となり、古典芸術観賞の的とされている。

夙く近江は猿楽揺籃地で坂本に日吉姓を称えて居住していた六代目日吉弥太郎から、奈良に移り金春座へ出演する事になり七代目は奈良に生れ、金春四郎次郎と称えた、之が大

蔵流の祖とされ、其孫に宇治源右ヱ門あり其弟子の五郎左ヱ門元宣が和泉流の祖となり、後に山脇の姓を名乗り、慶長十九年京都から尾州へ招かれ徳川義直に仕え、切米一〇〇石扶持方八口を給はり寛永八年和泉守に任ぜられた。

明治維新となり幕府制度の瓦解と共に能役者も扶持を離れ座も解散の形となり、西洋文化が輸入されて旧文化が廃れる状態となつて能・狂言は観る者も無く、一時は廃絶の運命となつたが其の後国内が治まるにつれて富有階級者によつて保護されることゝなり、漸く立直つたのである。

作家＝吉野時代に叡山の学僧玄恵法師の作として、五十九番数えられたものが有り、福ノ神、釣狐、鍋八鉢等も此の中の曲である。其の他室町時代には多く作られ織、豊、江戸時代に新作されたものもある。

題材＝室町時代の社会的雑事を題材とし、各階層に関した色々の事を元として当時の人情風俗を其儘描写し、之を面白可笑しく作つたものである。現在の時世では想像のつかない不合理な事柄が多く、例えば、落書が盛んに流行した当時、管領の門に落書して社会をのゝしり、政治当局者を悩ました、是は一方に政治の不満を公訴する手段であつたと思われる、又山伏が極めて横柄で威張るので、民衆は之を憎み落書して示した。之等を題材として狂言に作られ、之を公開して支配階級の圧迫に対する反抗にもなり、一方観衆を反省せしむる為めに作られたものもある、又、当時の大名は困窮疲弊して居た者が多い、されど持つて生れた横柄な気分は去る事が出来ぬそれが為めに思いもよらぬ失敗を仕出かす等狂言の面白いところである。

言葉＝国語史の研究上頗る貴重な資材で風俗と共に室町時代を推想せしむるものである、尤も京都を中心として行われたものであるから当時の上方言葉と思われる。

登場人物＝大名、目代、頼うだ者（主）冠者（召使）、田舎者、僧侶、山伏、賊、不具者、人物外のものとして鬼、神、亡霊、妖怪、又動物として狐、狸、馬、牛、猿等が登場する。

（終）

古書検　歌村彦四郎

文化九年二月家元の舞台披があつた雨のため延期されたところをみると、見所は庭先きであつたらしい、狂言ばかり十二番づゝ二日間催されています。

文化九年申二月四日、五日
舞台開狂言組

初日

ゑ比須大黒　山脇四郎　乙九郎　惣三郎
花あらそひ　早川山三郎　野村　栄治
栗　田　口　野村又三郎　次兵衛　栄治
むねつ幾　三宅惣三郎　藤九郎
はなこ　山和和泉　又三郎　乙九郎
かに山伏　早川　幸八　忠三郎　悦蔵

休息

うつほさる　四郎　又三郎　幸八
寝　音　曲　三宅藤九郎　乙九郎
泣　あ　ま　和泉　幸八　栄治
佐　渡　狐　山脇次兵衛　鉄蔵　又三郎
志とう方角　乙九郎　藤九郎　惣三郎
よね　市　和泉　幸　八　栄　治
藤九郎　栄四郎
次兵衛　彦次郎
山三郎　忠三郎

後日

三人長者　四郎　又三郎　次兵衛
歌あらそひ　早川忠三郎　悦蔵
雁　大　名　藤九郎　乙九郎　惣三郎
縄　なひ　又三郎　幸八　忠三郎
釣きつね　和泉　藤九郎
千　切　木　乙九郎　藤九郎　次兵衛
惣三郎　幸八
鉄　蔵　栄　治
又三郎　忠三郎

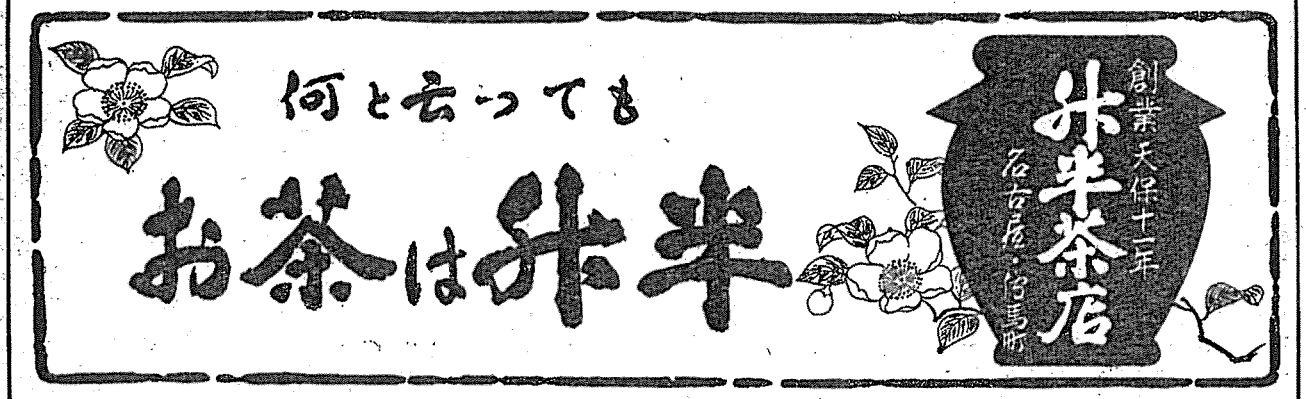
休息

孫　む　こ　惣三郎　藤九郎　乙九郎
名　取　川　次兵衛　鉄　蔵
木　六　駄　和泉　乙九郎　幸八
大　藤　内　幸八　又三郎
田　う　ゑ　和泉　四郎　栄四郎
栄　治　山三郎
彦次郎　次兵衛

以上

右杉原紙両面ニ刷ル、日並四日五日両日ノ処雨天ニ付五日七日ト両日無故障相済。

とあり、初日に花子、泣尼、米市、後日には釣狐、田植のシテ役を六代家元元貞が勤めておりますが、この人は文化十三年六月に七十才で没しておりますから、この時は六十六才ですが、是だけの大役をよくつづけて演つたものと其の精心力に頭が下ります。

楽師協議会より

九月二十七日竜吟会にて伊藤長八氏能「乱」の太鼓を披く（鬼頭氏社中）
小島鉄次郎氏能「望月」の笛を披く（藤田氏社中）
九月二十日清風社にて富田十寸穂氏安藤紀久代氏囃子シテを披く（大塚社中）